

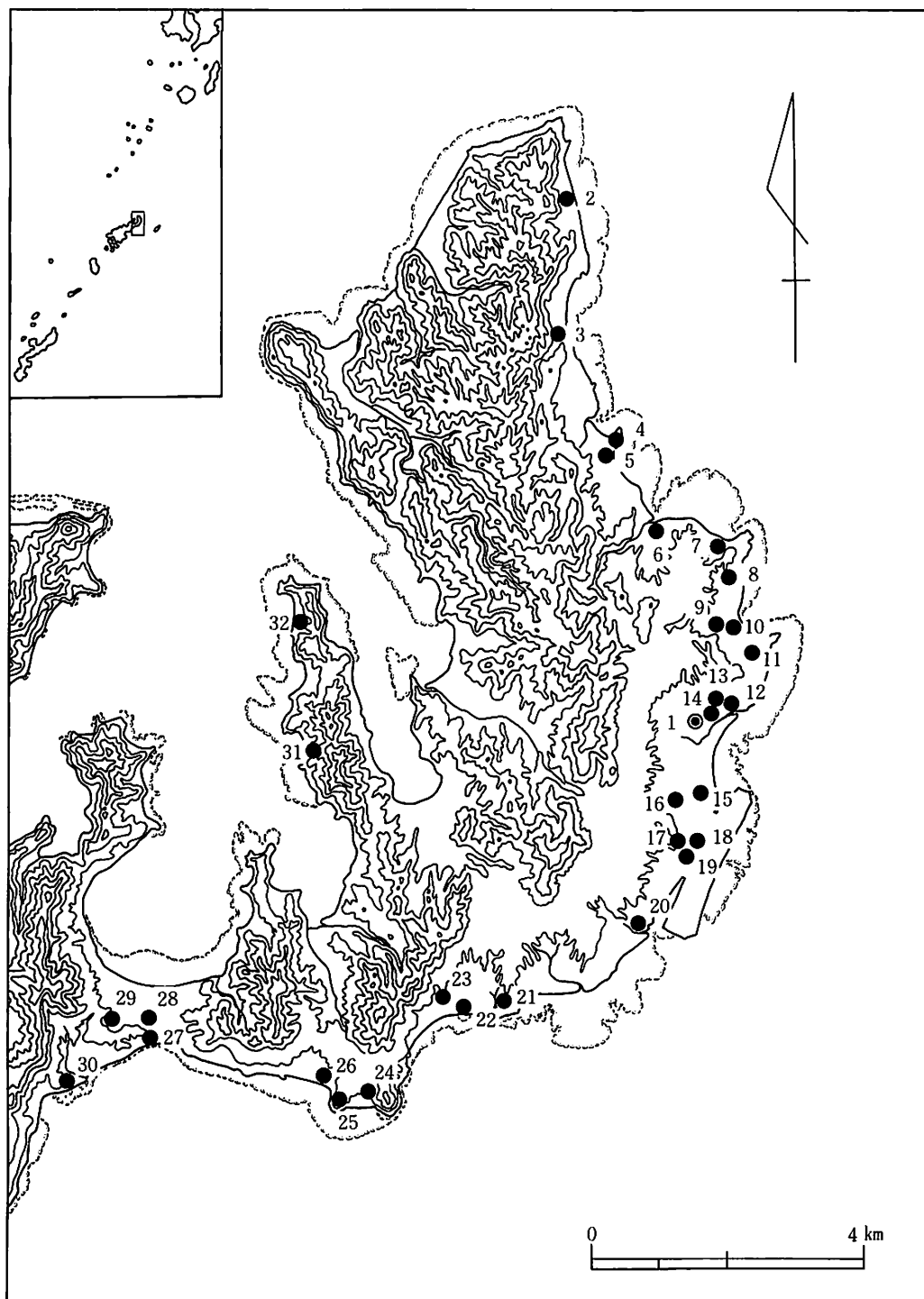
一、遺跡の位置と環境

南西諸島は九州南端から台湾北東端の間に弧状に続く島嶼群である。この列島は国分直一氏により、北部圏（種子・屋久・口永良部島を含む熊毛諸島）・中部圏（奄美諸島・沖縄本島及び付近島嶼を含む）・南部圏（宮古諸島・八重山諸島）の三文化圏に区分されている⁽¹⁾。またこの列島は地質構造の面から、火山の並ぶ火山前線より大陸側に位置する島弧（内帯）と、火山前線より大洋側に位置する島弧（外帯）とに分けることができる。トカラ列島から硫黄島・粟国島・久米島まで続く内帯の大部分の島は、火山島に分類される。一方、種子島・屋久島から奄美大島・徳之島・沖縄島とほぼ一線に並ぶ島々が外帯に相当し、これらの島々は主に古生代以降の堆積岩・変成岩からなり、内帯の島に比べて起源の古い島である。

奄美諸島は北緯28°線の南北に点在し、主島である奄美大島はそのほぼ中央に位置し、古成層とこれを通る火成岩を基盤とする。島の気候は年平均気温21℃～22℃、年間雨量2000mm以上であり、亜熱帯性の気候区分に属する。海洋性であるため気温の変化も少なく、四季を通じて温暖多湿である。島の植物については、熱帯性植物とともに、広葉樹が繁茂している。その分布は海岸砂丘上にはヒルガオ科の群落、砂丘後方にはアダン、その背後の低地にはガジュマル、海岸段丘からなる台地にはソテツ、丘陵地にはシイ・カシが繁茂する。また二次林はリュウキュウマツからなる。動物については、特別天然記念物であるアマミノクロウサギなどの固有種、猛毒を持つハブなどが棲息している。島の地勢は湯湾岳（694m）を最高峰に大半が山陵で占められ、海蝕崖・リアス式海岸などの地形が発達し、

1	宇宿小学校遺跡	12	宇宿港遺跡	23	ヤーヤ洞穴遺跡
2	用長浜遺跡	13	宇宿貝塚	24	明神崎遺跡
3	用遺跡	14	宇宿高又遺跡	25	湊城
4	辺留城遺跡	15	万屋遺跡	26	用安遺跡
5	辺留窪遺跡	16	万屋下山田遺跡	27	赤尾木遺跡
6	コビロ遺跡	17	ケジ遺跡	28	ウフタ遺跡
7	あやまる第2貝塚	18	万屋泉川遺跡	29	赤尾木保育所遺跡
8	あやまる第1貝塚	19	長浜金久遺跡	30	手広遺跡
9	喜子川遺跡	20	ナビロ川遺跡	31	鯨浜遺跡
10	マツノト遺跡	21	立神遺跡	32	サウチ遺跡
11	土盛遺跡	22	土浜遺跡		

第1表 笠利半島主要遺跡地名表



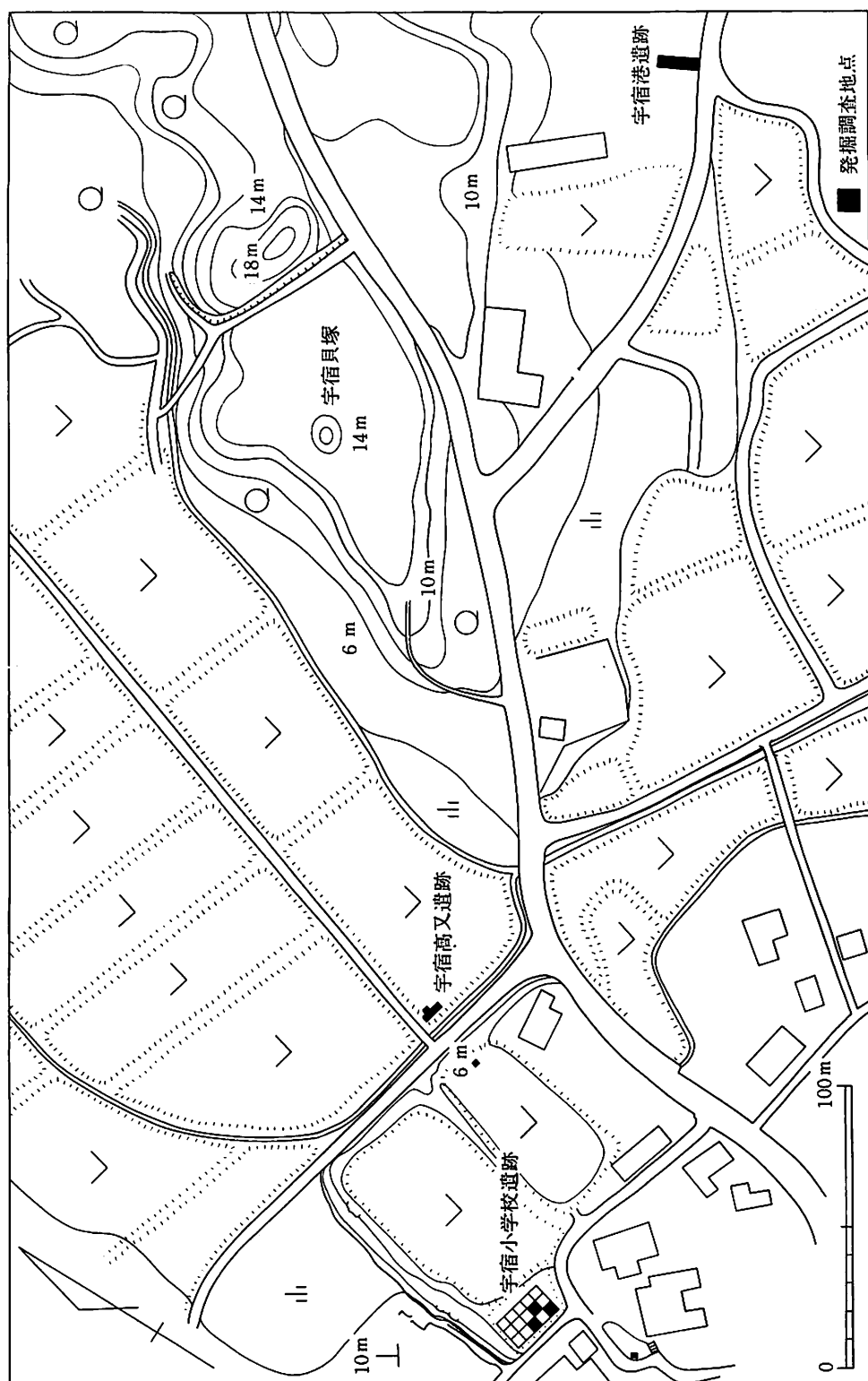
第 1 図 笠利半島遺跡分布図（第 1 表参照）

全体に急峻である。島の先史遺跡の分布をみると、なだらかな海岸段丘の広がる北部の笠利半島太平洋岸に、特に遺跡の集中がみられる（第1図）。

宇宿小学校遺跡（1）の所在する笠利町は、大島東北部に長く突出する笠利半島に位置する。笠利半島は標高200m足らずの大刈山・定山・高嶽からなる山塊によって東西に二分され、西側の笠利湾に面す地域では、特に丘陵が海岸に迫り、海岸線は激しく入り組んでいる。遺跡の数は東側に比べて極端に少なく、サウチ遺跡（32）と鯨浜遺跡（31）が知られているに過ぎない。一方、東側は海岸段丘が発達し比較的平坦で、海岸線も出入りが少ない。また東岸地域は砂丘やサンゴ礁の発達が著しく、豊富な食料資源を供給する礁湖も含めて、遺跡成立における重要な地形的要因を備えている。笠利町東岸の遺跡群は現在の南北に走る県道を境として、山側の古砂丘上に立地する遺跡と、海岸側の新砂丘上に立地する遺跡とに二分することができる。一般に前者は縄文時代、後者は弥生時代から古墳時代にかけての時期に比定されている。

宇宿小学校遺跡は鹿児島県笠利町宇宿に所在する。宇宿地区にはかなり高い密度で遺跡が存在しており、当遺跡の他にも宇宿貝塚（13）・宇宿港遺跡（12）・宇宿高又遺跡（14）などの遺跡が知られている。当遺跡は海岸から約400m、県道から約80m山側の位置にあり、周辺にはサトウキビ畑が広がる。海岸に至るまでの一帯には前川が砂丘の隙間を縫うように流れ、海に注いでいる。今回の調査地点は周辺遺跡に比べてかなり低く、標高5m程度であり、現在は畑地として利用されている。校舎の所在する標高8mの台地上が本来の遺跡の中心部であると考えられているが、今回はその台地の北東側傾斜地の調査を行った。調査地点は南から北へと傾斜しており、遺跡存続時には、入り江状の海岸線を形成する砂丘の縁辺部に位置していたものと考えられる。調査地点の西側にはビーチロックを基盤とする標高10mの台地が形成されており、これは標高4mの低地を隔てて、北東方250mの宇宿貝塚の立地する小丘陵地に、相対する位置にある。当時、この低地まで海水が侵入しており、こうした入り江・台地という地形的要素が宇宿小学校遺跡の成立要因の一つであったと考えられる。

また、西側台地の発掘地区に面す急斜面の岩盤が露呈する部分に、「トフル」と呼ばれる墓所が存在する（第3図）。このトフル墓は奄美諸島に古くから伝わっていた二次葬の風習を示すものである。斜面北端部の標高5mの地点に1基（1号）、斜面中央からやや南よりの標高7mの地点に2基（2・3号）が並んで存在する。4基めは2・3号のさらに南側に存在するが、人為的に全面が塞がれているため、ここではその存在を記述するだけに留



第2図 周辺遺跡分布図

める。2・3号の前面は地形がテラス状に均されており、4基いずれも人が容易に訪れることのできる場所に位置すると言える。露呈した岩に横穴を穿ち、その中に遺骨の納められた甕が十数基ずつ安置されている。1号が最も大きく開口幅は3～4mである。2号は開口幅2.5m、奥行き3～3.5m、3号は開口幅1.7m、奥行き1.5mであるが、3号については前面に土砂が堆積しているため、全容は明らかではない。 (原田)

註(1) 国分直一 『南島先史時代の研究』 1972

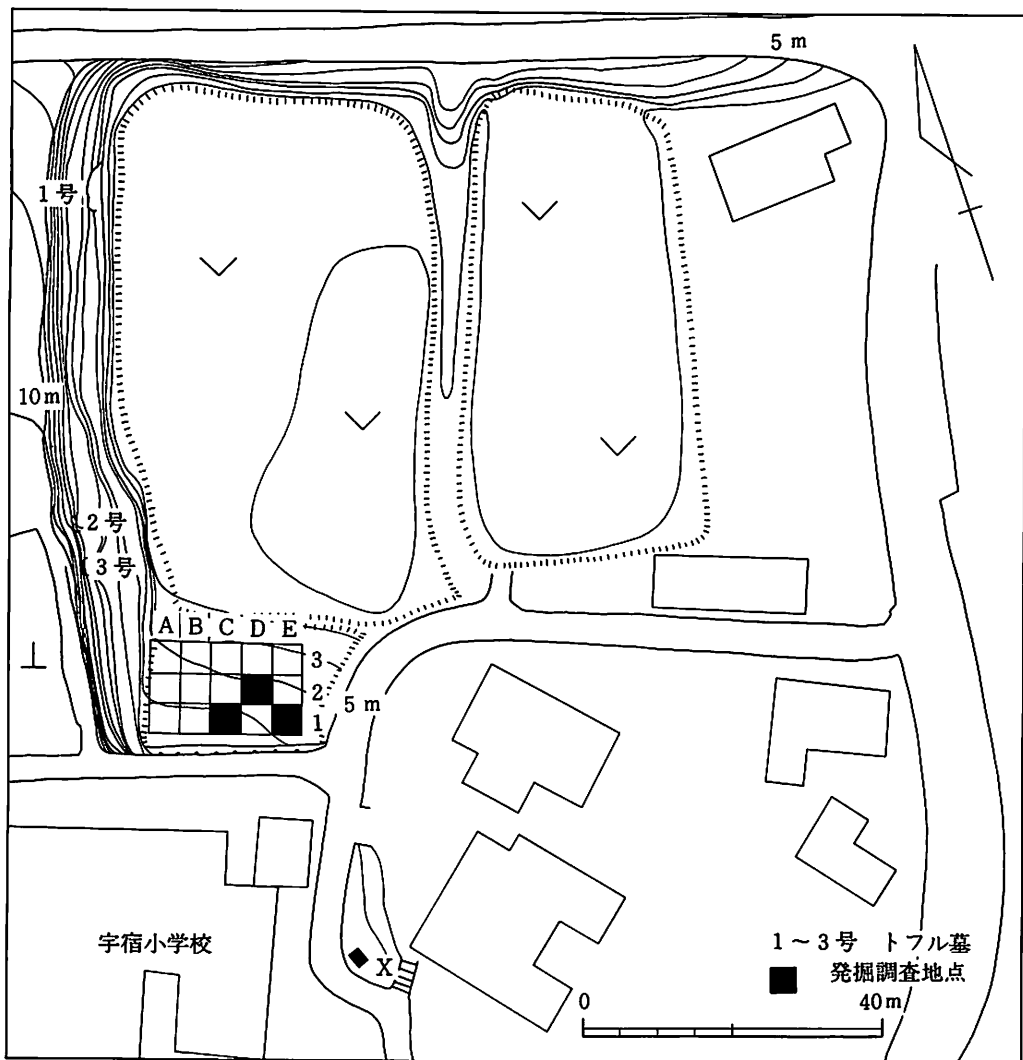
二、調査の概要

1. 目的と経過

奄美の島々では、これまでに相当数にのぼる発掘調査が行われている。これらの調査は開発との競合などの理由もあって、海岸部に立地する遺跡を対象とすることが多かった。また、奄美大島の笠利半島東岸の宇宿貝塚、徳之島南西岸の面縄貝塚群などは、古くから学術調査が行われ、奄美における編年研究の指標にもなっている遺跡として著名である。宇宿小学校遺跡が所在する笠利町宇宿地区は、縄文時代前期～中期を主体とする宇宿高又遺跡、縄文時代後期～弥生時代を主体とする宇宿貝塚、弥生時代を主体とする宇宿港遺跡などが存在する遺跡の密集地であり、これらはいずれも砂丘上に立地している。宇宿小学校には採集された石器及びいわゆる宇宿下層式とされる土器片が保存されているが、これらには宇宿小学校校庭及び付近より出土した遺物の他、宇宿貝塚採集の遺物も混在している。その他宇宿小学校遺跡出土遺物として出土地点の明瞭なものとしては、打製石斧1点⁽¹⁾・抉入片刃石斧⁽²⁾・弥生系土器の底部片⁽³⁾があるに過ぎない。

以上のように宇宿小学校遺跡の内容については不明瞭な点が多い。そこで当研究室では、南島先史遺跡研究の一環として今回の発掘実習を企画し、遺跡の性格の把握を主な目的とし、笠利町教育委員会の協力のもとに調査を遂行した。

調査はまず除草を行い、調査区には4×4mの方眼状にグリッドを設定した。グリッドには、南から北へ1・2・3・4……、西から東へA・B・C・D……とそれぞれ名付け、A-1グリッド・B-2グリッドなどのように呼称することにした。そしてC-1グリッド・D-2グリッド・E-1グリッドの計3グリッドを発掘した。調査の後半は壁崩落の危険性を考慮して、3グリッドともに2×4mを掘り下げ、最終的には数ヶ所で湧水点に達するまで掘り下げを行った。併せて当時の砂丘が良好に残っていると考えられた小学校



第3図 地形測量図

東側の地点で2×1.5mの試掘グリッドを設定し、Xグリッドと名付けて発掘した。

またE-1グリッドの南西隅において、自然遺物の構成をとらえるために、50×50×10cmのブロック・サンプリングを行った。また、細かい遺物の検出のために、C-1グリッドのV・VII層、D-2グリッドのIX層を取り上げ、水洗を行った。

発掘調査と並行して測量調査を行い、50cmごとに等高線を記入して、微地形を把握できるように努めた(第3図)。その際、併せて発掘区の西側急斜面のトフル墓4基の位置を記録し、写真撮影を行った。

(岩寄)

註(1) 松田宝蔵氏(元宇宿小学校長)が校庭で採集された。

九学会連合 『奄美—その自然と文化—』 1952

(2) 中山清美 「奄美における弥生時代相当期の資料紹介 [I]」 『赤れんが』 創刊号 1981

(3) 鹿児島県考古学会 『鹿児島県下の弥生土器』 1992

(1)～(3)に掲載されているいずれについても、今回の調査ではその所在を確認できなかった。

2. 層序

発掘地点は宇宿小学校が立地する台地の北東斜面にあたり、現地表面は北東側の低地に向かって緩やかな傾斜をなしている。基本層序としてⅠ～Ⅸ層が確認されたが、C-1グリッドではⅠ～Ⅷ層、D-2グリッドではⅠ・Ⅱ・Ⅳ～Ⅸ層、E-1グリッドではⅠ・Ⅱ・Ⅷ層のみが認められた。なお、遺跡の範囲確認のために設定したXグリッドでは、攪乱層下にⅧ層を確認したのみであった。以下に、基本層序を列挙する。

Ⅰ層 暗褐色砂層。現耕作土で厚さ50～80cmである。しまりがなく、砂の粒子は細かい。多量の貝殻の細片及び少量のクール¹⁾や炭化物を含む他、土や粒子の粗い砂をブロック状に混入する。その上面は発掘区の南から北にかけて緩やかな斜面となるが、東西方向にはほぼ水平に堆積する。ビニール・タイルなど現代の遺物の他、土器・青磁片が出土し、黒曜石のチップが1点検出されている。

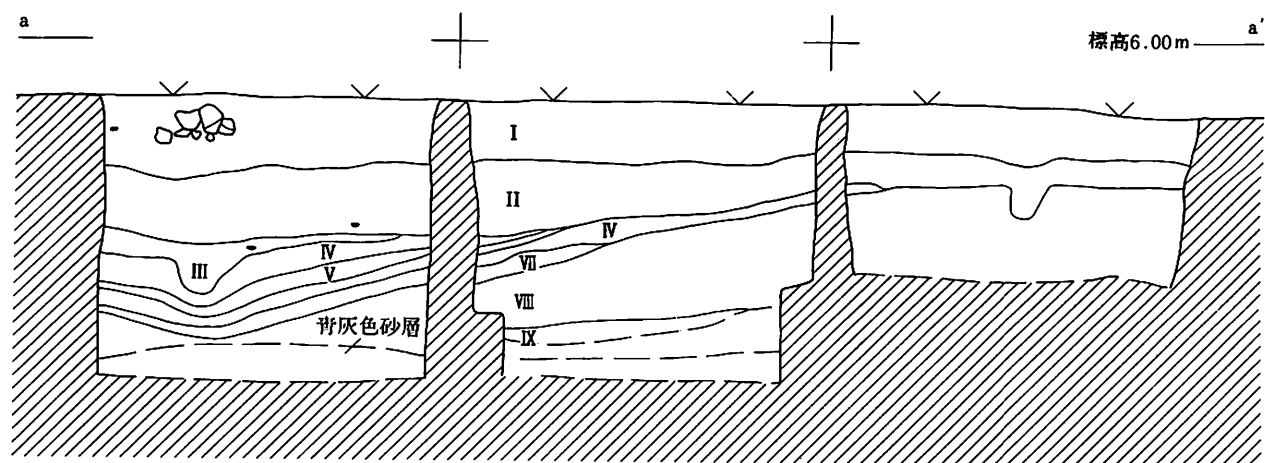
Ⅱ層 褐色砂層。Ⅰ層と同じく攪乱層である。しまりがなく、砂の粒子は細かい。貝殻の細片及びクール・炭化物を混入する。上面がⅠ層と同じく緩斜面をなすのに対し、Ⅲ層以下が急な斜面となるため、発掘区の南から北に向かってかなり厚みを増しながら堆積する。従ってⅡ層の厚さは10～140cmと幅が広い。現代の遺物の他、土器片・カムイヤキ窯系陶器片・青磁片・土盤が出土し、特に先史時代の遺物の占める割合がⅠ層より高い。また、獣魚骨が少量検出されている。

Ⅲ層 軟質の黒褐色土層。C-1グリッドの西壁から北壁にかけて広がり、D-2・E-1グリッドではみられない。C-1グリッド西側においてⅣ層上面が最大幅80cm、深さ40cm程で溝状に落ち込んでおり、Ⅲ層はこの落ち込み内及びその周辺部分に堆積している。上記の堆積状況より、宇宿小学校の立地する発掘区南側の丘陵上、あるいは西側の台地上からの流土と考えられる。土器片・カムイヤキ窯系陶器片の他、打製石鏃を含む石器が出土し、貝類・獣魚骨が多量に含まれる。

Ⅳ層 明褐色砂層。しまりがなく、砂の粒子はやや粗い。C-1グリッド及びD-2グリッドの南西方向から北東方向にかけてみられる。厚さ30～40cmである。多量の土器片の他、貝殻の小片を多く含む。

Ⅴ層 におい黄褐色砂層。腐食質砂層であり、砂の粒子は粗い。貝殻の粉末、親指大のパミスを混入する。厚さ10～20cmと薄く、C-1グリッドからD-2グリッドの西側までみられる。少量の土器片の他、打製石鏃を1点出土している。

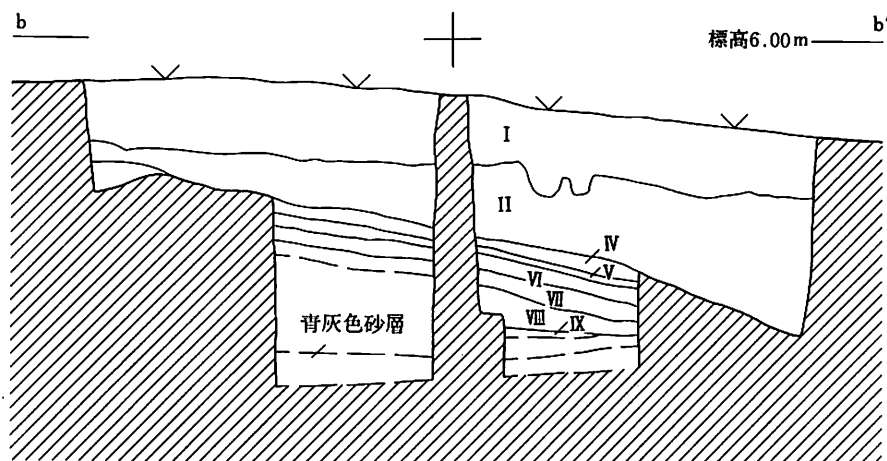
Ⅵ層 明褐色砂層。砂の粒子は粗く、パミスを少量含む。厚さ15～20cmである。C-1・



C-1 グリッド北壁

D-2 グリッド南壁

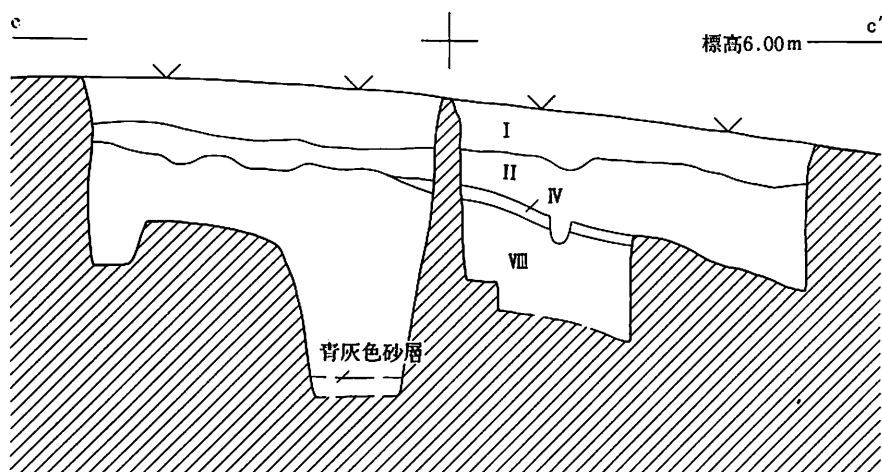
E-1 グリッド北壁



C-1 グリッド東壁

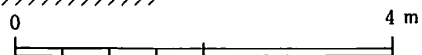
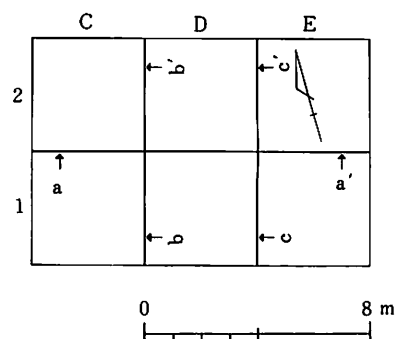
D-2 グリッド西壁

- I 層 暗褐色土層
- II 層 褐色砂層
- III 層 黒褐色砂層
- IV 層 明褐色砂層
- V 層 にぶい黄褐色砂層
- VI 層 明褐色砂層
- VII 層 黒褐色砂層
- VIII 層 明黄褐色砂層
- IX 層 黒褐色砂層



E-1 グリッド西壁

D-2 グリッド東壁



第4図 土層断面図

D-2グリッドの全面及びE-1グリッドの西側の一部で確認される。少量の土器片の他、獣魚骨をいくらか含む。

VII層 黒褐色砂層。生活による汚染を受け、黒みを帯び、下部はやや褐色を呈する。厚さ10～20cmで砂の粒子は細かく、パミス・炭化物を多量に混入する。C-1グリッドからD-2グリッドの西側までみられる。少量の土器片の他、火を受けた多量の貝類・獣魚骨とともに焼石・炭化物が検出され、VII層上面は一時的な生活面と考えられる。

VIII層 明黄褐色砂層。砂の粒子は細かく、少量の炭化物とパミスを含む。Xグリッドを含む発掘区の全域で確認される。C-1・D-2グリッドでは汚染を受けてやや黒みを帯びるが、E-1グリッドでは混入物も少なく純粋な砂層に近い。遺物の集中はVIII層上部に限られ、土器・石器及び貝類・獣魚骨が多く出土する。

IX層 黒褐色砂層。砂の粒子は細かく、炭化物を多く混入する。D-2グリッドのみで確認され、広範囲には広がらない。少量の土器片とともに火を受けた貝類・獣魚骨・焼石が検出され、VII層と同様、その上面は一時的な生活面と考えられる。

なお、IX層以下を一部掘り下げたところ、20cm程で青灰色の砂層に達し、さらに40cm掘り下げた標高2.40m付近で湧水を確認した。

今回確認されたI～IX層のうち、I・II層は攪乱層、III～IX層が遺物包含層であり、特にVII・IX層は生活層と考えられる。I層及びII層の上面は北東側に向かって緩やかな斜面をなし、東西方向にはほぼ水平に堆積する。それに対しIII層以下は、同様に北東方向へ傾斜しつつもその傾きは急であり、東西方向にもかなりの高低差をもつ。特にC-1グリッド西よりにおいては、III層以下が大きく落ち込み、窪地状の地形をなしている。VII層の汚染もこの部分において最も濃密である。上記のことより、旧地形は全体的には北東側に向かって現在より傾きの急な斜面となって低地に続いており、同時に北西側は窪地状の落ち込みをなしていたことが想定される。なお、I・II層とIII層以下の堆積状況の相違より、前者が客土である可能性が高い。発掘区南側の道路建設時に土砂を搬入したという地元の古老の弁も、その可能性を示唆するものである。また、I・II層とそれ以下の層とが、各グリッドにおいて不自然な断絶を示しており、発掘区を含む斜面全域が客土搬入時に広範囲な削平を受けていることが考えられる。

註(1) 砂丘でみられる、凝固した砂層を指す現地での呼称。

3. 遺物の出土状況

今回の調査区においては、Ⅰ・Ⅱ層が攪乱層であり、Ⅲ層以下からは、特に目を引く遺物としてⅢ・Ⅴ層より打製石鏃が1点ずつ、Ⅳ～Ⅵ・Ⅶ層より弥生土器がそれぞれ1点ずつ出土した。しかし、遺物の出土状況としては、Ⅶ・Ⅸ層で遺物の集中箇所が確認された以外、特筆すべき状況を示すものはなかった。従って、ここではⅦ・Ⅸ層の遺物の出土状況を中心に述べ、その他の層については簡単に触れるに留める。

Ⅲ層の遺物は全てC-1グリッド出土である。これらの遺物はグリッド西側半分、特に溝状の落ち込み部分からまとまって出土した。打製石鏃1点もこの落ち込み部からカムイヤキ窯系陶器を含む多量の土器片とともに出土した。

Ⅳ～Ⅵ層の遺物の出土は、上部ではかなりの量がみられたが、下層に移るに従いその量は減少していった。その一方で、親指大のパミスの混入がみられ、その量は特にⅥ層で多くなった。弥生時代前期の壺形土器と打製石鏃が1点出土した。

Ⅶ層は炭化物・パミスを多量に含み、西側ほど堆積は厚い。弥生時代前期の壺形土器を含む土器片・凹石・ヤコウガイ螺蓋製利器・ヤコウガイ製貝匙・貝類・獣魚骨が出土した。貝類には穿孔されたマガキガイやチョウセンサザエなどが含まれる。C-1グリッド西壁側においては、特に遺物が集中して検出された（図版6上）。拳大の石やサンゴ・イノシシの下顎骨・ウミガメ類の甲羅・ヤコウガイなどの貝類がまとまって出土し、そのうちのいくつかは火熱を受けており、拳大の炭化物も検出された。D-2グリッドでは120×90cmの範囲で、食物残渣を一括廃棄したような獣魚骨の集中箇所が検出された。特に集中してみられる2ヶ所については円形のピット状を呈しており、それぞれ径28cm、深さ12cm、径40cm、深さ22cmである。しかし、内部からの獣魚骨の出土量が上面に比べ少ないことから、砂地を掘りくぼめて廃棄したものではなく、一括して廃棄された獣魚骨による下部への汚染と考えられる。Ⅶ層からは明確な遺構は検出されなかったが、層の堆積状況及び遺物の出土状況から、その上面は一定期間人々の生活面として利用されたものと考えられる。

Ⅷ層の遺物は層上部に特に集中して出土し、下部ではほとんどみられない。さらに、生活による汚染など、人の活動の痕跡はみられないことから、砂丘形成時の自然堆積層と考えられる。

Ⅸ層は、D-2グリッドでのみ検出された。炭化物を多く含み、土器片・凹石・磨石・ヤコウガイ螺蓋製利器の他に、貝類・獣魚骨が出土し、貝類・獣魚骨の多くは火熱を受けていた。グリッド南西隅で約1.5m程の間隔をもって炭化物の集中箇所が2ヶ所認められた

(図版6下)。そのうち東側の箇所は径約60cm、深さ約15cmの円形を呈し、内部からは土器片が少量出土したのみであった。西側の箇所は検出時に東西56cm、南北65cm、深さ約15cmの規模をもち、調査区外に広がるため全容を知ることはできなかったが、南側にさらに広がるものと思われる。内部からは炭化物が多量に付着した土器片・焼石・獣骨が出土した。これらについては、継続的に火を焚いた様子は窺えず、また、炉としての明確な構造も持たないことより、その性格は明らかにし難い。(市川・田中・水上)

三、出土遺物

1. 土器 (第5～7図 図版10～12)

今回の発掘調査において土器片は約1500点出土したが、分類上有効と思われるものは約100点に過ぎない。それらはいずれも小片であり、全形を復元できるものは皆無であった。

これらをまず器種の違いによって、

A：大型の深鉢形及びこれに類するもの

B：中型の深鉢形及びこれに類するもの

C：壺形及びこれに類するもの

以上の3種に大別し、さらに文様の有無及び口縁部の形態を中心とした器形の特徴から分類した。また、類別不可能な資料及び底部片については後述する。

以下、各類について述べる。

A：深鉢形土器 (大型)

I類 (2・6・33) 無文で口縁部が帯状に肥厚し直立するものである。器壁は厚く、内器面には横方向のヘラ状工具によるナデ調整、外器面には横方向の磨研を施している。2はヘラ削りによって口唇部に幅約0.5cmの突出部を作り出している。33は口唇部に方形の突起をもち、その中央部にV字状の刻みを有する。外器面には煤の付着が著しい。いずれも胎土は緻密で砂粒と雲母片を少量含む。焼成は良好で、黒褐色を呈する。

II類 (3・4) 無文で口縁部が直立し、口縁部肥厚帯がI類に比して著しく幅広になるものである。3は口縁部の外器面側に薄く粘土を貼り付けることによって肥厚帯を作り出し、口唇部は丸くおさめている。器面にはヘラ状工具によるナデ調整を施す。4は口唇部を外反させ、舌状におさめている。器面にはナデ調整を施す。胎土に砂粒と少量の雲母

片を含む。焼成は良好で、橙色を呈する。

III類 (13) 無文で外器面に断面三角形の貼付突帯を有するものである。器壁が厚く、器面には丁寧に横方向のナデ調整が施されている。胎土に砂粒と多量の雲母片を含み。焼成は良好で、黒褐色を呈する。

IV類 (35・52・53) 無文で胴部から口縁部にかけて僅かに内傾し、口唇部はゆるく外反するものである。口縁部外器面に粘土を貼り付けて、肥厚部を作り出している。器面にはヘラ状工具による横方向のナデ調整が施されている。35・53は口縁部断面が蒲鉾状に肥厚し、内器面の口縁付近から口縁肥厚部・胴部にかけて、縦位の粘土紐が貼り付けられている。52は口縁部を肥厚させるものの、その稜ははっきりしない。類例が大島郡住用村サモト遺跡6号遺構から出土している⁽¹⁾。いずれも胎土に細砂粒を多く含み、その他に雲母片をかなり含む。焼成は良好で、橙色・明赤褐色を呈する。

V類 (10) 無文で口縁部が肥厚せず直立し、さらに外器面に突起を有するものである。器面にはヘラ状工具による横方向のナデ調整が施されている。外器面に直線状の突起を横位に貼り付ける。胎土に多量の粗砂粒と雲母片を含む。焼成は良好で、赤褐色を呈する。

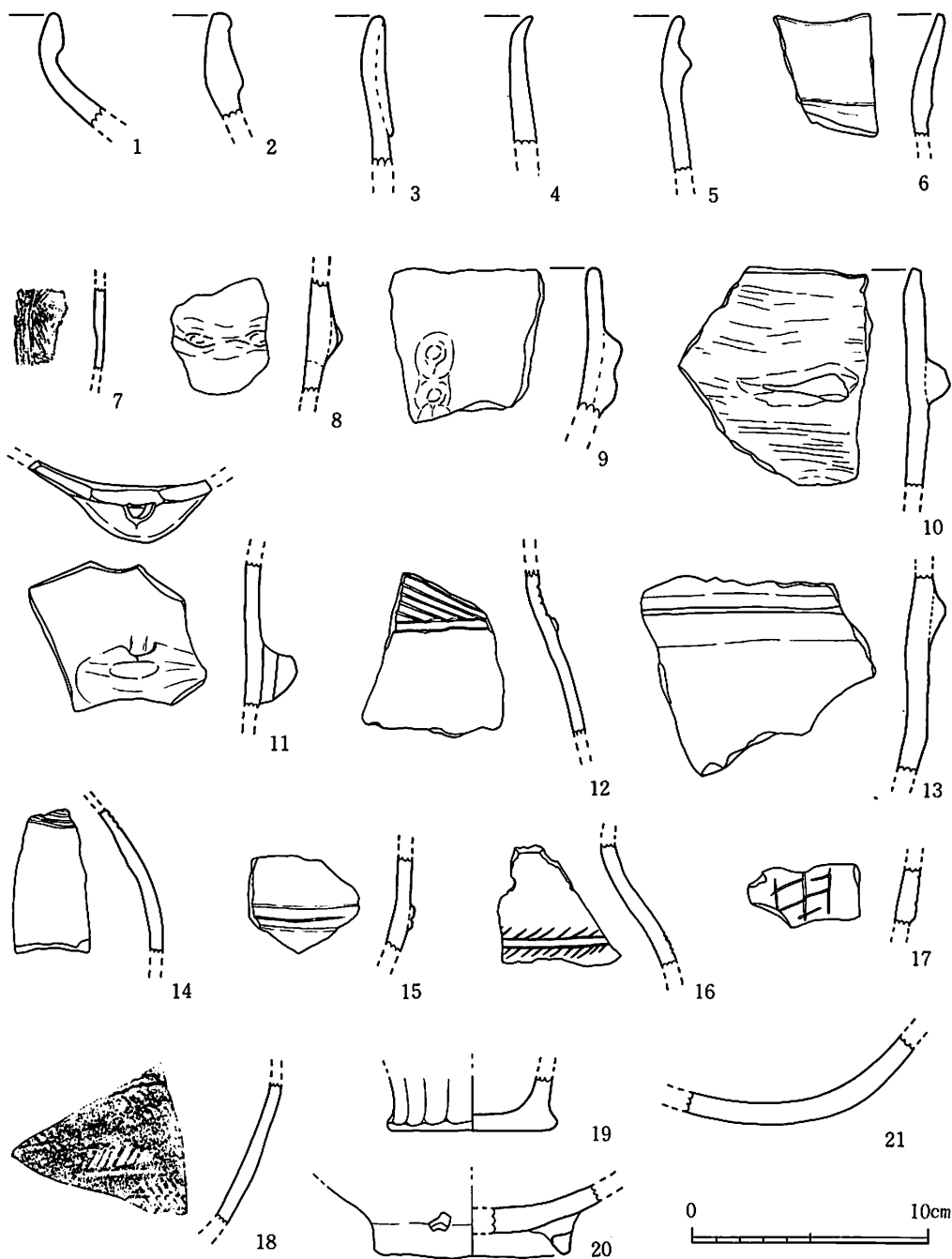
B：深鉢形土器（中型）

I類 (48) 口縁部及び頸部と胴部との境にそれぞれ1条の刻目突帯を貼り付け、突帯間とその下位に沈線文を施すものである。48は叉状工具により連続刺突された貼付突帯の下方に十数条を1単位とする縦位の沈線を施す。器面にはハケ状工具による横方向の調整後、丁寧なナデ調整を施す。胎土に粗砂粒と雲母片を含む。焼成は良好、暗褐色を呈する。

II類 (34・46) 口縁部の断面が蒲鉾形あるいは三角形に肥厚し、直立するものである。34は内器面と口縁肥厚部にハケ状工具による横方向の調整痕を残し、外器面にはナデ調整を施す。46はヘラ状工具によるナデ調整を施す。いずれも胎土は多孔質で砂粒と雲母片を含む。焼成は不良で、橙色を呈する。

III類 (5・26・28～30・32) 口縁部が帯状に肥厚し、直立するものである。主に横方向のナデ調整を施す。肥厚部下端の肥厚が目立つもの(5・26・30・32)が多く、5は特にそれが顕著で突帯状を呈する。32は波状口縁である。胎土は多孔質で砂粒と雲母片を含む。焼成は不良で、橙色を呈するものが多い。

IV類 (8・9・11) 外器面に突起を有するものである。横方向のナデ調整が主であるが、9は内器面に縦方向のハケ状工具による調整痕を残す。8は双円形の突起を横に、9は縦に貼り付けたものである。11は径0.5cmの孔を有する橋状の貼付突起を有し、突起の上



第5図 出土土器実測図(1)

C-1 グリッド II層: 9・12・18 III層: 3・4・8・15・19
 IV~VI層: 5・10・13・16 V層: 11 VI層: 1・17・20
 VII層: 2・6・7・14・21

部は平坦で、下部は膨らみをもつ。突起中央部の孔は、器面上に棒状のものを置き、その上から覆うように突起を貼り付けたことによるものである。8・11の胎土は多孔質で砂粒と少量の雲母片を含む。焼成は不良で、橙色を呈する。9は胎土に砂粒と雲母片を含む。焼成は良好で、赤褐色を呈する。

C：壺形土器

I類（12・47・49） 突帯によって区画した口縁部文様帯の内部に沈線文あるいは綾杉文を施すものである。12は1条の突帯を貼り付け、その上方に斜行沈線を施している。47は叉状工具によって鋭く連続刺突された2条の貼付突帯間に横位の綾杉文を施す。口縁部外器面側が剝落するものの、本来は粘土を貼り付けて肥厚部を作り出していたものと考えられる。49は口縁部を断面蒲鉾形に肥厚させ、口縁肥厚部下に両側に連点文をもつ縦位の微隆起突帯と、斜位の沈線を施している。いずれも器面はナデ調整が施されている。12は胎土に砂粒とごく少量の雲母片を含む。47の胎土は緻密で細砂粒と雲母片、49は砂粒と雲母片を含む。いずれも焼成は良好で、橙色を呈する。

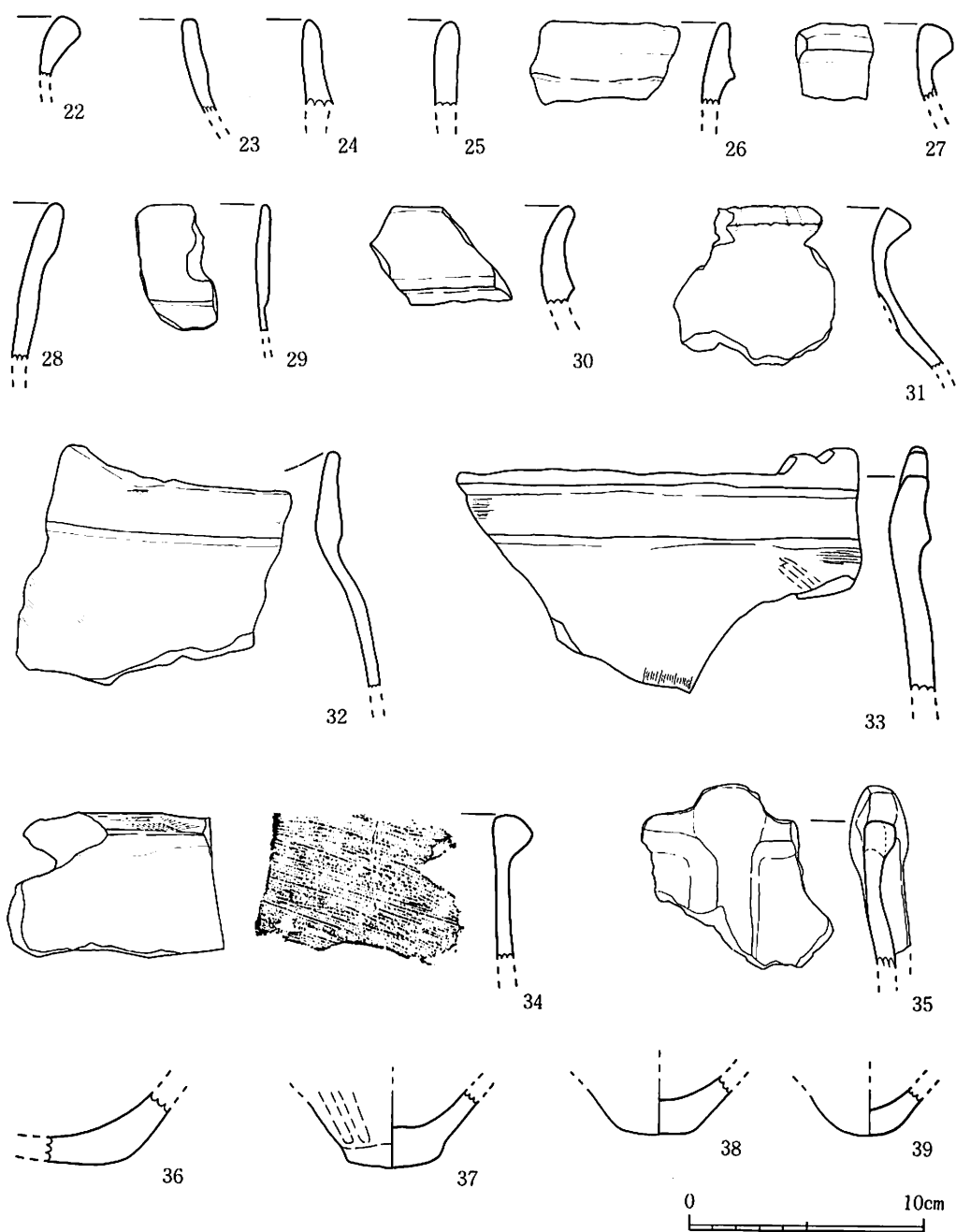
II類（31） 有文で口縁部の断面が三角形に肥厚するものである。31は口唇部に縦位の沈線が数条施されている。器面には横方向のヘラ状工具によるナデ調整が施されている。胎土は多孔質で砂粒と雲母片を含む。焼成は不良で、茶褐色を呈する。

III類（44） 無文で口縁部の断面が三角形に肥厚するものである。外器面には縦方向のヘラ削りの後、丁寧なナデ調整を施し、内器面には横方向のヘラ状工具によるナデ調整の痕を残す。復元口径は5.5cmである。胎土に砂粒と雲母片を含む。焼成は良好で、赤褐色を呈する。

IV類（1） 無文で口縁部が帯状に肥厚するものである。ナデ調整を施す。胎土は多孔質で砂粒と雲母片を含む。焼成は不良で、橙色を呈する。

V類（14・16） 頸部がくびれ、肩部から胴部にかけてわずかに張る器形のものである。島外からの搬入土器と思われる。14は肩部から胴部にかけての小片であり、肩部に横位の櫛目文が3条施される。胴部があまり張らない器形になるものと考えられる。16は頸部から肩部にかけての小片である。横位の平行沈線2条の上下に斜位の短沈線を組み合わせた文様を、頸部と肩部の境付近に施す。頸部のくびれ具合に対し、肩の張りが大きい。いずれも磨研が施され、胎土は泥質で砂粒と少量の雲母片を含む。焼成は良好、褐色を呈する。

その他、小片であるため器種の不明なものとして、22・25・27・40・42・43がある。これらは、口縁部の断面が蒲鉾形あるいは三角形に肥厚するもの（22・27・40・42・43）、口縁部



第6図 出土土器実測図(2)

D-2 グリッド II層: 22 IV層: 25・27・35・39

IV～VII層: 23・24・26・28～30・33・36～38

VIII層: 32 IX層: 31・34

が帯状に肥厚するもの（23・24・41）、口縁部が肥厚しないもの（25）に分類される。器面にはナデ調整が施される。43は口縁肥厚部下にヘラ状工具による横方向の細かい削痕が認められ、内器面にはヘラ状工具による横方向のナデ調整が施される。いずれも胎土は多孔質で砂粒と雲母片を含み、焼成は不良で、橙色・暗褐色を呈する。口縁部が肥厚するもののうち、断面が蒲鉾形あるいは三角形になるものはB II・C IV類、帯状になるものはB III・C V類にそれぞれ含まれるものと思われる。

また、器形の不明なものとして7・15・17がある。7は器壁が薄く、丁寧に磨研が施されている。文様は縦位の平行沈線2条の両側に斜位の短沈線を施す。胎土は緻密で砂粒と雲母片を含み、焼成は良好で、茶褐色を呈する。文様の特徵からC II類に分類されると思われる。15は突帯上に細沈線が1条施されている。類似するものが、鹿児島県笠利町あやまる第2貝塚第6トレンチ1区のVI層より出土している⁽²⁾。器面にはナデ調整が施され、胎土には砂粒と雲母片を含み、焼成は良好で、褐色を呈する。17は格子目状に沈線が施され、類似するものが鹿児島県徳之島町城島遺跡で出土している⁽³⁾。器面にはナデ調整が施され、胎土は多孔質で砂粒と雲母片を含む。焼成は不良で、橙色を呈する。

底部片（19～21・36～39・50・51）

丸底（21）、平底（19・36～39・50・51）、台付（20）がある。

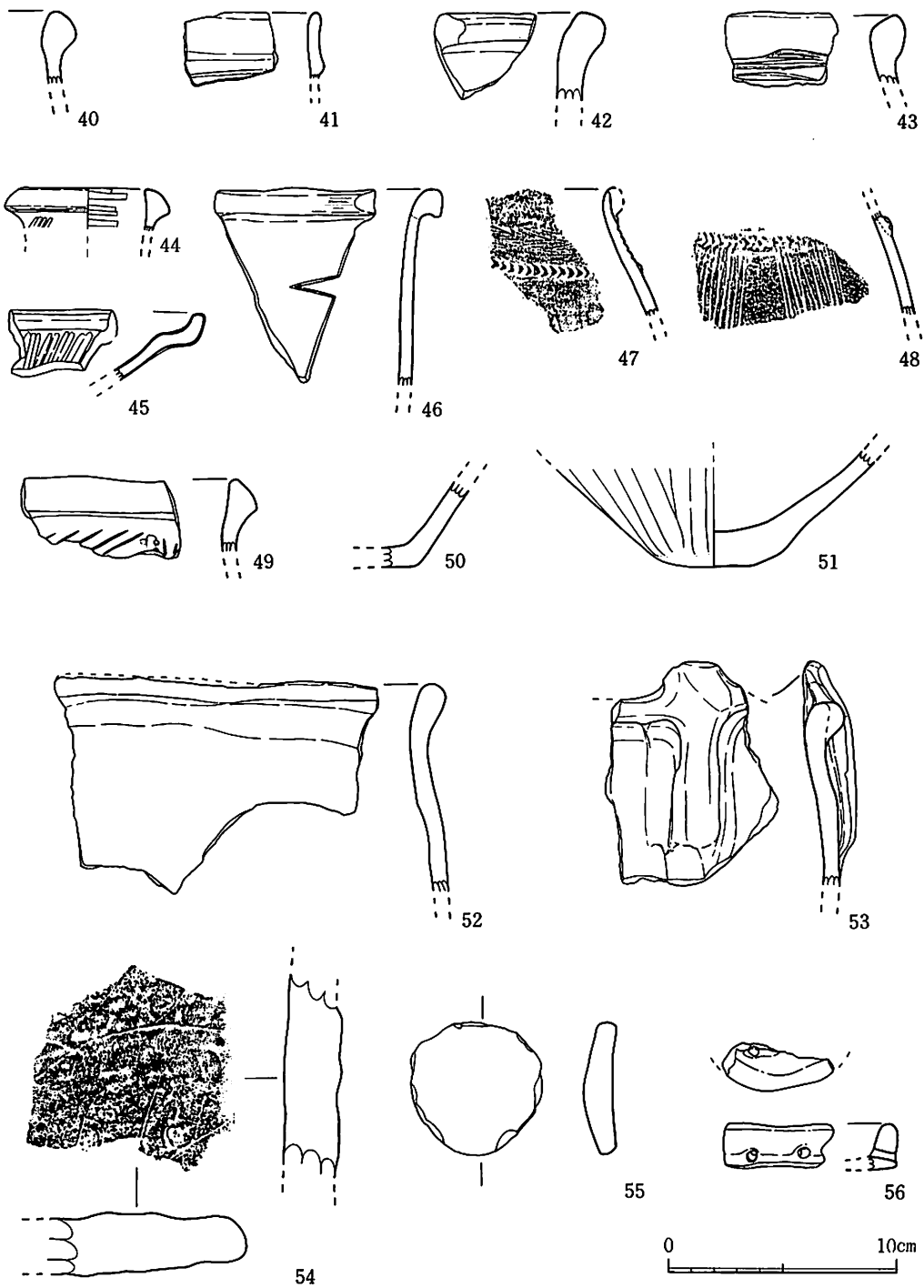
36～39・51は丸底ぎみの平底であり、37・50の器面にはナデ調整が施されている。19は外器面にヘラ状工具による縦方向のナデ調整が施され、わずかにくびれている。底面に木の葉の圧痕を有する。復元底径は7.4cmである。20は丸底に脚台を貼り付けたもので、脚台には外側から内側へ半截竹管状工具による穿孔が認められる。類例が鹿児島県竜郷町手広遺跡で出土している⁽⁴⁾。胎土は多孔質で砂粒と雲母片を含み、焼成は不良で、褐色を呈する。20・21・36～39・51の胎土は多孔質で砂粒と雲母片を含み、焼成は不良で橙色を呈する。19・50の胎土は砂粒と雲母片を含み、焼成は良好で褐色を呈する。

以上の記述において触れなかったものに、以下のものがある。

18はカムィヤキ窯系陶器の胴部片であり、外器面には斜格子状のタタキ目、内器面には格子状のタタキ目がみられる。45は青磁盤であり、内器面に蓮弁文を持ち鐙状口縁となっている。胎は灰白色、釉はオリーブ灰色を呈する。ともにII層から出土している。

土製品（54～56）

54は土版であり、粘土塊を板状に延ばしている。焼成は良く、胎土は緻密で砂粒を少量含むが、雲母片はほとんど含まれない。厚さは2cm程で、片面には木の葉の圧痕がある。



第7図 出土土器・土製品実測図(3)

C-1 グリッド：Ⅱ層：56 Ⅲ層：55 Ⅶ層：54

E-1 グリッド：Ⅱ層：45 Ⅶ層：41

Ⅷ層：40・42～44・46～48・50・51

X グリッド表採：49・52・53

手広遺跡にその類例がみられる⁽⁴⁾。55は直径6.0cm、厚さ1.0cmの円盤状を呈している。底部片の周縁を打ち欠いて整形したものと考えられる。胎土に砂粒と雲母片を含み、焼成は良好で、褐色を呈する。54・55いずれも用途は不明である。56は端部が1.5cmほど垂直に立ち上がったものであり、径0.5cmの孔が2ヶ所、外側から内側へ穿たれている。その形状より器台と考えられる。

これらを従来行われている型式分類にあてはめて概観すると、いわゆる宇宿上層式の範疇にあてはまるもの（AⅣ、BⅡ・Ⅲ、CⅢ・Ⅳ類）を主体とし、その他にカヤウチバンタ式の範疇に含まれるもの（AⅠ～Ⅲ類）、面縄前庭式に含まれるもの（BⅠ類）、喜念Ⅰ式に含まれるもの（CⅠ・Ⅱ類）、外耳土器（AⅤ・BⅣ類）、九州からの搬入土器かと思われるもの（CⅤ類）がある。（蔵富士）

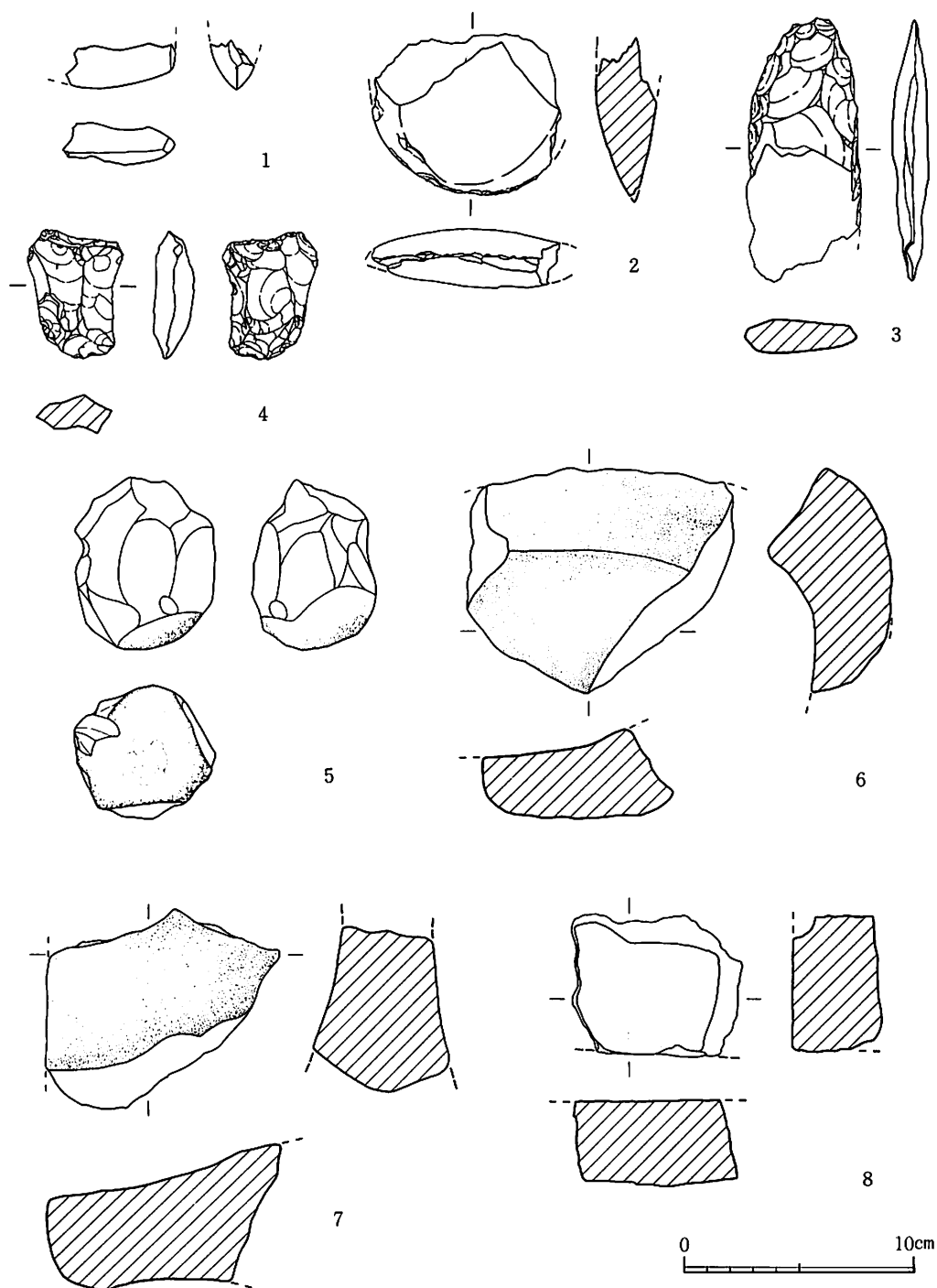
- 註(1) 熊本大学文学部考古学研究室 「サモト遺跡」 1984
(2) 笠利町教育委員会 「あやまる第2貝塚」 1984
(3) 熊本大学文学部考古学研究室 「城島遺跡」 1989
(4) 熊本大学文学部考古学研究室 「手広遺跡（概報）」 1986

2. 石器（第8～10図 図版13・14）

今回の調査で採集された石器は破片も含めて計23点である。その内訳は、打製石斧3、磨製石斧2、石斧未製品1、敲石・磨石・凹石類11、石皿2、砥石1、打製石鏃2、楔形石器1である。表面採集資料を除くと、Ⅰ層より1、Ⅱ層より5、Ⅲ層より3、Ⅴ層より1、Ⅵ層より1、Ⅶ層より1、Ⅷ層より5、Ⅸ層より2、計19点が出土し、そのうちの17点を図示した。

石斧（1～3）

1は輝緑凝灰岩製の両刃磨製石斧の刃部破片である。小片のため全形は不明である。残存部全面が丁寧に研磨されている。表裏面とも刃に対して垂直方向の短い使用痕がみられ、刃先には数ヶ所の細かな刃こぼれがある。2は粘板岩製の片刃石斧の刃部破片である。図の表面には自然面を残し、裏面は剝離面である。刃部は剝片の縁部をほぼそのまま利用しており、表面の一部及び裏面に剝離による調整を施すに留めている。また、その部分には使用による摩滅が認められ、先端から右寄りに細かな刃こぼれが認められる。3は千枚岩状粘板岩製の打製石斧である。刃部側約3分の2を欠損している。平面形はほぼ楕円形、断面形は偏平である。左側縁を打点とする横長剝片を素材とし、周縁部に二次加工を施して成形してある。使用痕や装着痕は認められない。



第8図 出土石器実測図(1)

C-1 グリッド II層: 4 III層: 3
D-2 グリッド II層: 1 IV層: 2 IX層: 5
E-1 グリッド VIII層: 6~8

敲石・磨石・凹石類（5・9～15）

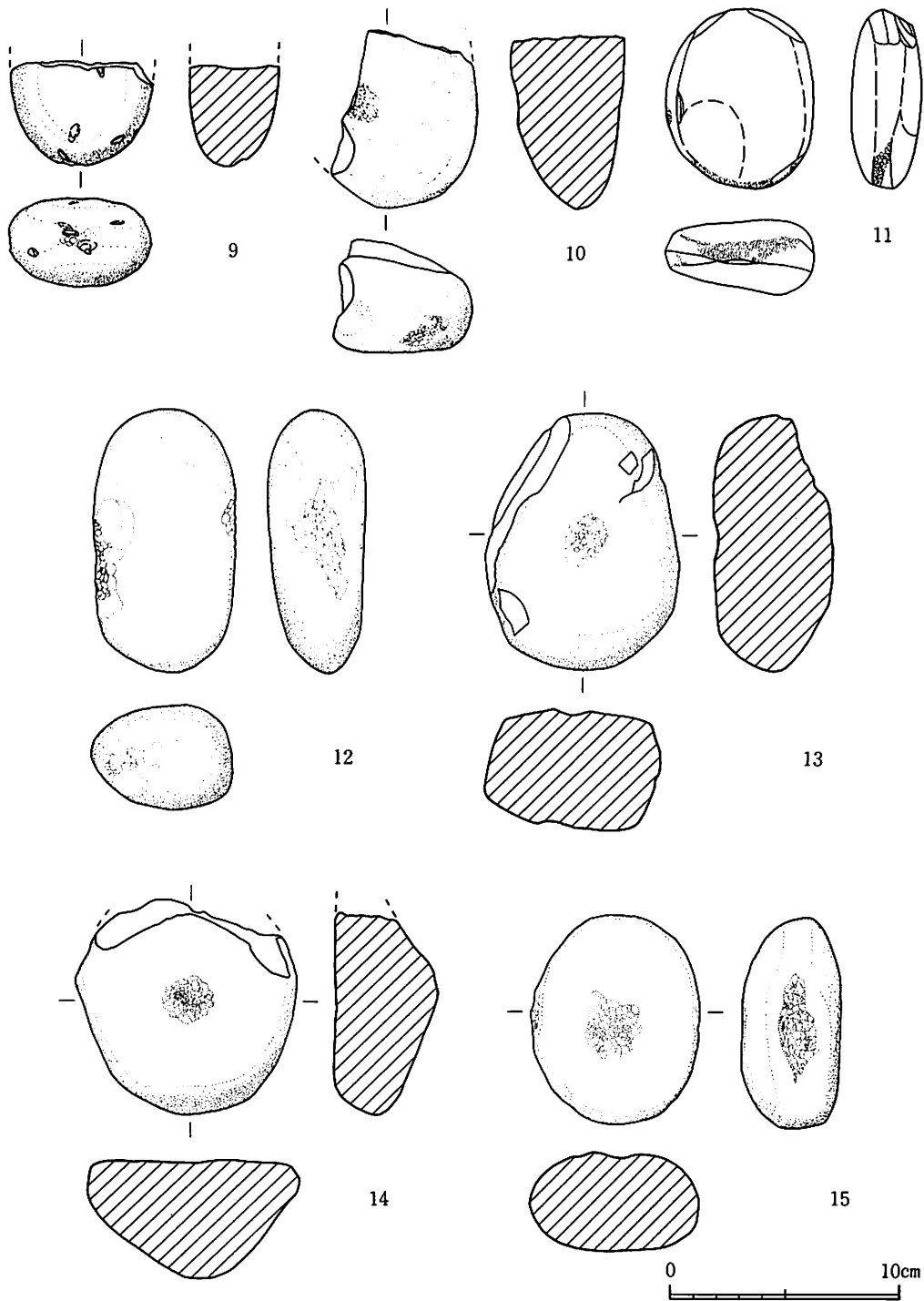
5は砂岩製の敲石である。平面形は歪な楕円形、断面形はほぼ円形を呈する。大部分は打割面であり、この面が成形によるものか使用によるものかは不明で、自然面は下端部にわずかに残るのみである。この自然面の中央部径20mmの範囲に敲打痕が集中してみられ、その集中によってわずかにくぼんでいる。9～14はいずれも自然礫をそのまま利用している。9は砂岩製の敲石・磨石の破片である。全形の約2分の1を欠損している。下端部にわずかな敲打痕が認められ、表裏面ともに中央部に磨痕があるが不明瞭である。10は含礫砂岩製の敲石・磨石・凹石の破片である。全形の約4分の3を欠損している。中央部は敲打によりくぼんでおり、その周辺には磨痕も認められるが不明瞭である。周縁部には部分的に敲打痕がみられる。全面が赤変しており、特に破損部で著しい。11は偏平な楕円形の輝緑凝灰岩製の敲石・磨石である。重量は257gである。周縁部はよく使用されていて、ほぼ平坦な磨面をなしている。一部に顕著な敲打痕がみられる。形態とその使用痕から、ストーン・リタッチャーであるとも考えられる。12は平面形が長楕円形を呈する柱状の砂岩製の敲石である。重量は468gである。右側縁には敲打痕、左側縁及び下端部には敲打痕と剝離を伴う使用痕が顕著である。13は平面形は卵形、断面形は隅丸長方形を呈する砂岩製の凹石である。重量は737.5gである。表裏面とも敲打による凹みを中央部に有する。14は砂岩製の磨石・凹石である。全形の約3分の1を欠損している。断面形は逆三角形を呈している。表面の中央部には敲打による凹みを有するが、この面は磨石としても使用されており、その使用頻度が高かったために凹みは不明瞭になっている。15は水磨を受け楕円形になった石灰岩を利用した敲石・凹石である。重量は232gである。表裏面及び両側縁に敲打痕が認められる。

石皿（6・7）

石皿と考えられる破片が2点出土している。2点とも砂岩製である。部分的にしか残っていないため、全形は不明である。6は使用面が深くくぼんでおり、その表面は平滑である。周縁部に幅約35～45mmの縁を有し、軽い凹凸はあるものの縁面をなしている。裏面は啄彫によって一様に形を整えてある。7は縁をもたず、使用面は浅くくぼみ、表面は平滑である。側面及び裏面も形を整えてある。

砥石（8）

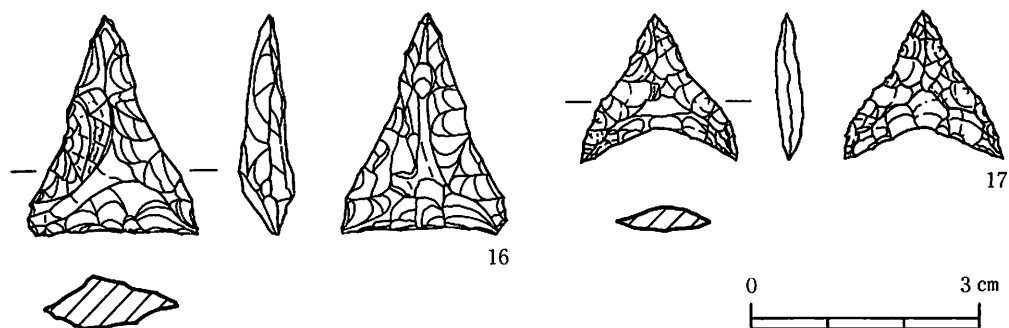
砂岩製である。上面を使用面とし、使用により平滑になっている。砥石かと思われるが、小片であるために判然としない。下側約3分の1程度の部分が赤変している。



第9図 出土石器実測図(2)

C-1 グリッド II層:12 III層:14 VII層:10

D-2 グリッド I層:9 II層:11 VIII層:13 IX層:15



第10図 出土石器実測図(3)
C-1 グリッド III層：17・V層：16

打製石鏃（16・17）

完形の平基無茎式（16）と凹基無茎式（17）のものが1点ずつ出土している。2点ともチャート製である。表裏両面ともに中央部で膨らみをもち、稜線が認められる。丁寧な作りの石鏃であり、三辺とも押圧剥離が両面に施されている。刃こぼれなどの使用痕はみられない。16は長さ29mm、幅22mm、厚さ7mm、重量2gである。平面形は二等辺三角形、断面形は菱形を呈している。17は長さ19mm、幅21mm、厚さ3.5mm、重量0.5gである。平面形は正三角形で基部は抉れており、両脚が外側に張った形である。表裏両面とも極めて細かな剥離が施され、断面形は柳葉形を呈している。先端及び基部の両端ともに鋭く尖っている。なお、奄美・沖縄での打製石鏃の出土は珍しく、他に出土した遺跡を第2表に示した。

楔形石器（4）

チャート製の剥片石器である。完形品であり、重量は38.5gである。平面形はほぼ逆台形、断面形は偏平な六角形を呈する。表面には縦長剥片の剥離面が2面みられ、裏面には主要剥離面を部分的に残す。両端部に両極剥離痕が認められることから、楔形石器であると考えられる。類似品が鹿児島県笠利町下山田II遺跡から出土している⁽⁵⁾。（岩谷）

註(5) 鹿児島県教育委員会 「下山田II遺跡・和野トフル墓」 1988

3. 貝製品 (第11・12図 図版14下～17上)

今回の調査において採集された貝製品は、その他の人工遺物及び自然遺物と混在する形で出土したものであり、出土状況に特に記述すべき点は認められなかった。以下、貝製品について、その形態的な特徴により分類し、それに従って説明することにする。

ヤコウガイ螺蓋製利器 (1～6) 総数26点出土した。そのうち破損品が14点を占める。ヤコウガイの螺蓋部の薄くなっている方を使用部位とし、その周縁部に沿って剝離面を有している。剝離は主に表面にみられ、一部裏面に及ぶところもある。剝離の方向に規則性は認められない。恐らく、使用の結果として螺蓋の周縁部が剝離したものであろう。破損品は刃部を下にして縦方向に割れており、垂直方向の衝撃を受けるような使用法が採られたものと思われる。また、刃部が使用のために潰れて鈍くなっているものもある。

貝製小玉 (9～15) 巻貝の螺蓋部もしくは螺塔部を切断、研磨し、その中央に穿孔してあるものを一括した。9～13は小型の巻貝の螺蓋部の中央に径1.0～3.5mmの孔を有するものである。厚さ0.1～0.5mmと非常に薄く、製品であるか否かは判然としない。14はイモガイ科の貝類の殻頂部を径9.0mm、厚さ1.0～1.5mmに薄く研磨している。研磨は表裏面及び周縁部に施されている。ほぼ中心に径約4mmの孔を有し、その周縁に部分的に螺旋を残している。15もイモガイ科の貝類の殻底部を研磨し、殻頂部に径2.0mmの孔を有している。裏面には螺旋を明瞭に残す。全体に水磨を受けており、研磨痕は不明瞭で、製品か否かは判断しかねる。形態は不均整である。

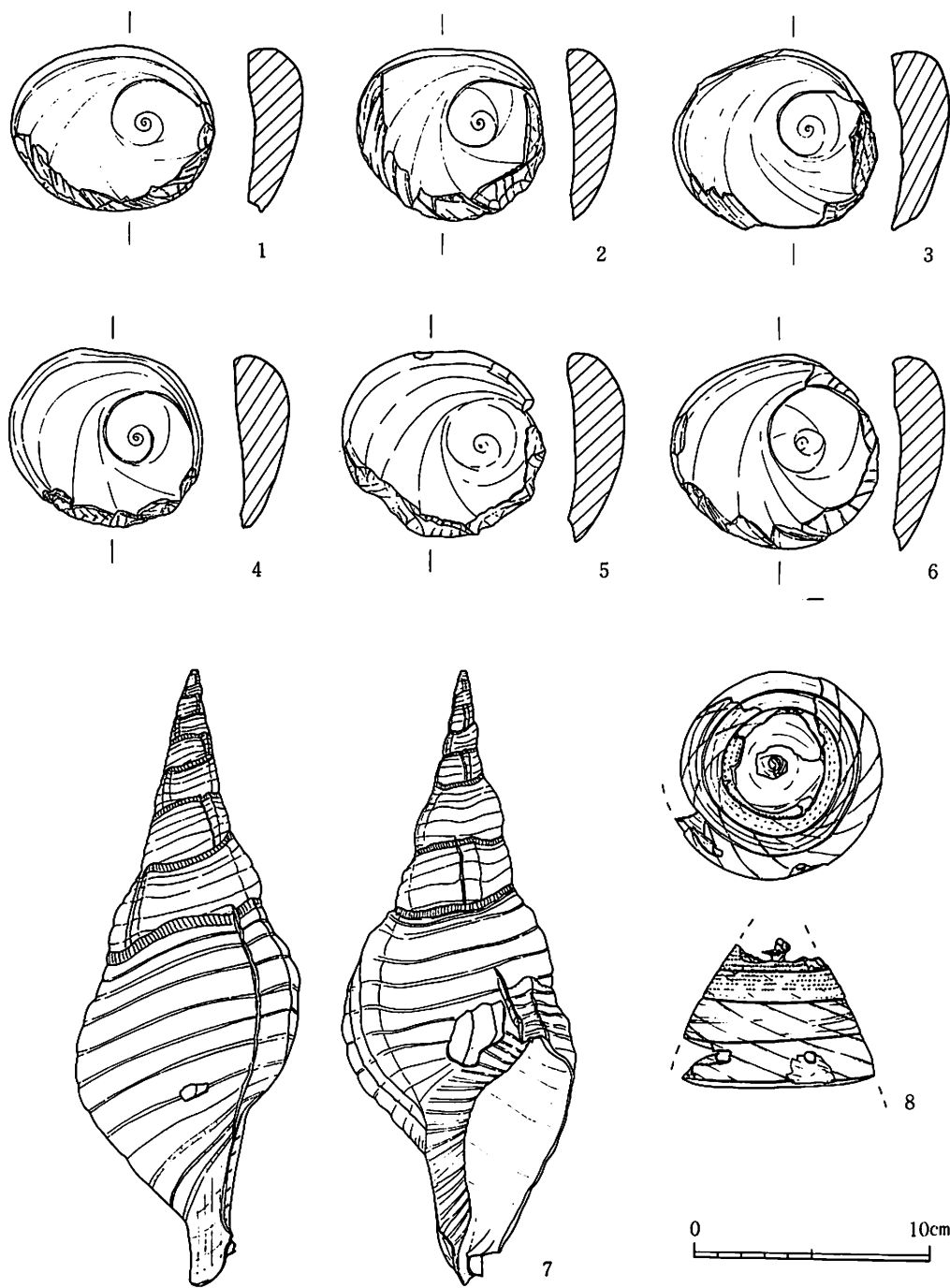
ヤコウガイ加工品 (22・23) 22は貝匙の製作途中に廃棄されたものか、その未製品であると考えられる。体層部を横長に粗く打割してあり、周縁部の一部を研磨してあるのみで、外面の結節肋も取り外さずに残してある。なお、先端部が巻貝の外唇部となるように切り取ってある。この他に3点同様の資料が採集されている。23は体層部の加工品で、厚さ0.5～3.0mmの板状を呈する。破片のためその全形を窺い知ることはできない。外面及び側面のみ研磨されており、先端部については真珠層まで研ぎ出してある。部分的に自然面を残しているものの、外面の3分の2は剝落しており、真珠層が露呈している。側面は切断面であると考えられる。内面は加工を施さずに、真珠層をそのまま残している。加工品であることは間違いがないが、その用途については判然としない。

穿孔貝 (7・16～21) 二枚貝の殻頂部・巻貝の体層・次体層部に孔が穿たれているが、それ以上の加工を施されることはなく、また穿孔部に使用時の痕跡が認められないものを指す。従って、穿孔部を有しているが、貝製品として積極的に認定できないものを穿孔貝

として一括した。今回、このような貝類は総数403点採集されている。ここでは、そのうちの7点を図示した。種類は、ホラガイ（7）・オオベッコウガサ（16～21）・マガキガイ・イトマキボラ・チョウセンサザエ・ヒメイトマキボラ・スイジガイ・クモガイ・サソリガイ・ザマオキニシ・タカラガイ・リュウキュウマスオなど、多種にわたるが、リュウキュウマスオ1点を除くと、他は全て巻貝であった。その中でもマガキガイが全体の約3分の2を占めており、その他にイトマキボラ・チョウセンサザエも目立っている。それらの孔の位置・大きさには、それぞれある程度の規則性が認められることから、食肉のための破砕痕と考えられる。また、マガキガイ・イトマキボラの一部には火熱を受けた痕跡の認められるものもある。

7はホラガイの内唇部に長径40mm、短径25mmの孔が穿たれているものである。体層部の孔は廃棄後にあいたものである。内唇部の孔は、食肉の際、螺蓋を容易に取り外すために穿たれたものと考えられる。また、食肉という目的を考えると穿たれた孔が小さいが、これは食肉後に道具として転用することを意図していたためであろう。殻底部に火熱を受けた痕跡は認められない。同様の資料が3点採集されている。このような穿孔部を持つホラガイは、鹿児島県笠利町長浜金久第Ⅰ遺跡・伊仙町犬田布貝塚、沖縄県伊平屋村久里原貝塚・具志川村清水貝塚・竹富町大泊浜遺跡⁶⁾などにおいても出土している。一般的には体層部に1孔を穿つものが多いが、その中には体層部と内唇部とに1孔ずつを有するものもみられる。それらの遺跡においては、民俗例を援用しながら、「ホラガイ製容器」「ホラガイ有孔製品」という名称で、薬罐としての機能を想定してある。それらには、体層部における火熱の痕跡が必ずしも認められるわけではない。今回採集された資料は類例に比して、4点ともその孔の位置がわずかに内唇部寄りに穿たれている。

16～21はオオベッコウガサの殻頂部に孔を有するものである。その法量は長さ43～63mm、幅34～53mmで、全体的に小型である。穿孔部は径6～50mmというように、大きさに幅があり、最大の孔径を有する21でも、長径50mm、短径39mmである。どの資料も穿孔部を打ち欠いただけでその周縁部を研磨するなどの加工を施しておらず、ある程度整った楕円形の環状を呈している21以外は、穿孔部がいずれも不整形である。本標品と類似の資料は、沖縄県伊平屋村久里原貝塚・読谷村木綿原遺跡・具志川村大原貝塚⁷⁾などで出土報告がある。21と同様の資料は「貝輪」もしくはその未製品として報告されているが、殻が薄いためにわずかな衝撃が加わっても孔があくような貝でもあり、未製品の場合は、果たしてそれが加工によるものであるか否かの判別は困難である。



第11図 出土貝製品実測図(1)

C-1 グリッドII層: 6・8 C-1 グリッドIII層: 1 C-1 グリッドVI~VI層: 5
D-2 グリッドI層: 3 D-2 グリッドIV~VII層: 7 D-2 グリッドIX層: 4
E-1 グリッドVIII層: 2

サラサバティ有孔製品(8) 殻頂部及び殻底部を欠損している。次体層部に径約5mmの孔が45mmの間隔をおいて2孔穿たれているのみで、それ以外の部位への加工は施されていない。孔は外部から打ち欠いて穿たれたものである。穿孔部に紐ずれなど使用時の痕跡が認められないことから、実際の用途は判然としない。民俗例では、次体層部に1孔を穿ち、そこから空気を吹き込むことによって身を取り出す方法が知られており⁽⁸⁾、本資料はそれに関係するものであるとも考えられる。(田中)

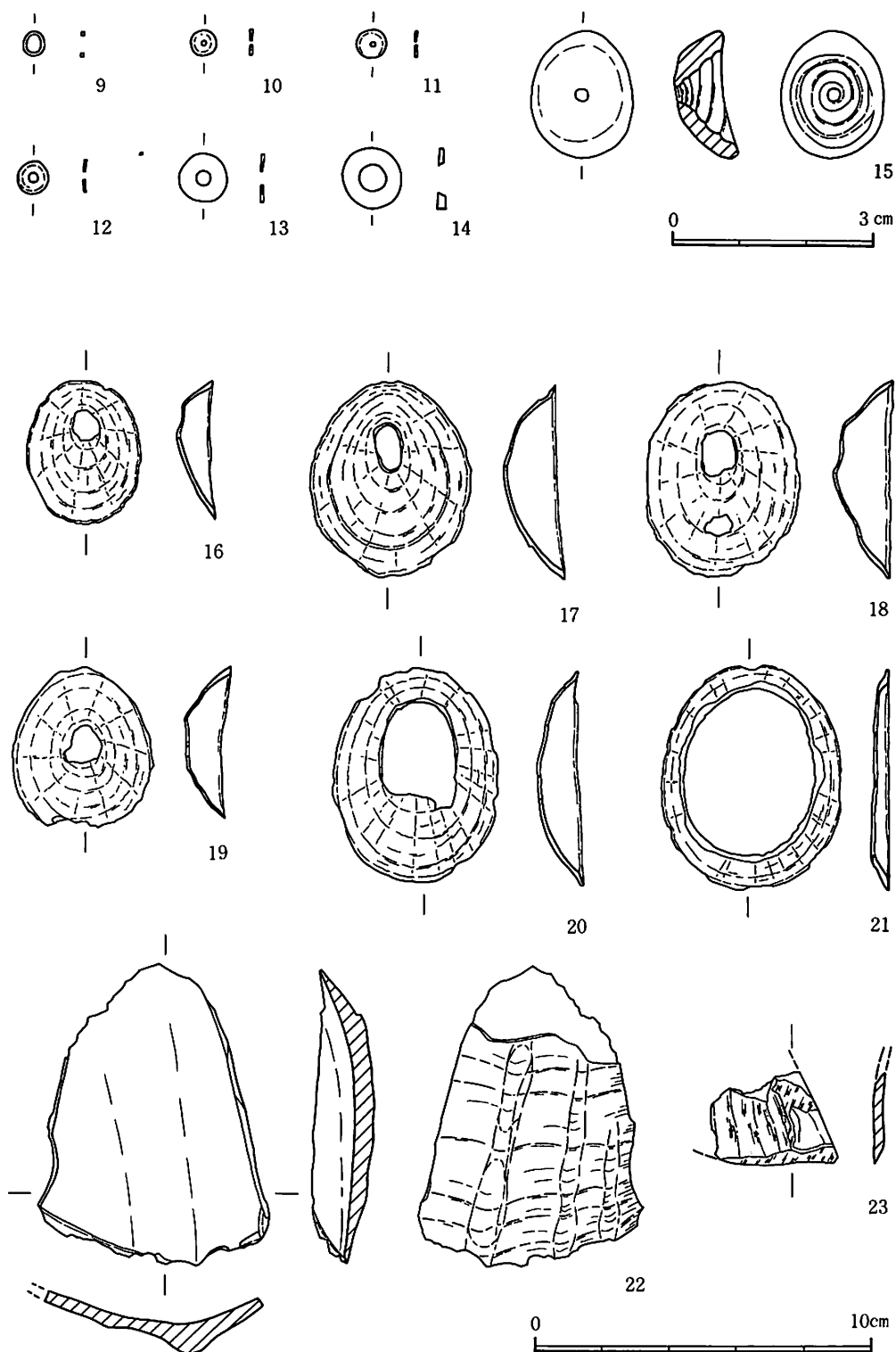
- 註(6) 伊平屋村教育委員会 『久里原貝塚』 1981
沖縄県教育委員会 『下田原貝塚・大泊浜貝塚』 1986
沖縄県・具志川村教育委員会 『清水貝塚』 1989
伊仙町教育委員会 『犬田布貝塚』 1984
鹿児島県教育委員会 『長浜金久遺跡』 1985
(7) 読谷村教育委員会 『木綿原』 1978
沖縄県教育委員会 『大原』 1980
伊平屋村教育委員会 『久里原貝塚』 1981
(8) 鹿児島県笠利町教育委員会中山清美氏の御教示による。

4. 自然遺物 (図版17下～18)

今回の調査区からは、人工遺物とともに貝類・獣魚骨を主体とした自然遺物も多数採集されている。これらは、その全てでないにせよ遺跡を残した人々の食物残滓であると考えられる。以下に、採集された遺存体について同定を行い、判明したものについての種名のリストを掲載するとともに、その概述を行うことにする。

貝類としては、二枚貝類(斧足綱)10科16種、巻貝類(腹足綱)23科59種を同定し得た⁽⁹⁾(第3表)。数量的にはマガキガイ・イトマキボラ・チョウセンサザエが全体のほぼ半数を占めている。貝類の中には、前述したように、穿孔部を有するものが多数みられる。出土数の多さと、ある程度規則性をもった穿孔の方法から、これら3種を主体として、貝類が先史時代の人々の日常的な食物の一端をなしていたものと思われる。貝類で棲息域の判明したものについてみると、圧倒的主体を鹹水産が占めており、その他に陸産・汽水産のものがみられる。淡水産のものは採集されていない。また、鹹水産のものの中でもリーフ内に棲息するものが多数を占めている。これらの貝類の多くは、現在でも宇宿漁港リーフ内に棲息している⁽¹⁰⁾。

貝類のほかに、獣魚骨・甲殻類・ウミガメ類・ウニ類・サンゴなども出土しており、獣魚骨には、イノシシ・イヌ・ウシ(II層より)・ブダイ類(2～3種)・ハリセンボン類・ウツボ類などがみられ、魚類についてはまだ数種増えるであろうという鑑定結果を得た。獣骨ではイノシシが多量に検出されていることが特徴である。その詳細については、最終



第12図 出土製品実測図(2)

C-1 グリッドⅢ層: 18 C-1 グリッドⅤ層: 9・12・20

C-1 グリッドⅣ～Ⅵ層: 17 D-II グリッドⅡ層: 15・19

D-2 グリッドⅣ～Ⅶ層: 16 E-1 グリッドⅧ層: 13・14・21・22・23

的な鑑定結果を待ちたい。

また、C-1 グリッドVII・V層およびD-2 グリッドIX層については、微細な自然遺物を採集し、各層の性格を把握するために、1mmメッシュを使った水洗作業を行った。その詳細については現在鑑定中であるが、現時点において判明している事柄について述べることにする。

C-1 グリッドVII層においては、多量のパミスおよび炭化物・貝類・獣魚骨がみられ、その他に焼石・サンゴ・ウニ類の棘・ウミガメ類の甲羅・土器片がある。同V層においては、多量のパミスとともに炭化物・貝類・獣魚骨・甲殻類・ウニ類の棘・サンゴ・種子・土器片がみられた。VII層に比してV層においてはウニ類の棘が増加傾向にある。

D-2 グリッドIX層においては炭化物が多量に採集され、それらに伴って、炭化した獣魚骨・貝類・土器片がみられた。

ブロックサンプリング

今回の調査では、VIII層における自然遺物の定量的な変化を把握するために、E-1 グリッドの南西壁隅に50×50cmの小グリッドを設定してブロックサンプリングを行った。10cmずつ層を水平に切ってサンプリングし、最終的には計9回、90cmの厚さに渡ってサンプリングを行った。

採集したサンプルを1mmのメッシュにかけ、水洗を行った結果、炭化物・貝類・獣魚骨・土器片・礫が検出された。そのうち貝類については二枚貝類1科1種、巻貝類13科21種を同定し得た。以下に種名のリストを掲載し、そのサンプリング毎の個体数を示すことにする(第4表)。なお、個体数の算定については、二枚貝類は殻頂部の残存しているものについて、左殻・右殻をそれぞれ数え、そのどちらか多いほうの数を個体数とし、巻貝類については殻頂部の残存しているもの、もしくは完形に近いものを1個体として数えた。なお、サンプルは各回毎に上から①・②・③・・・とした。(田中)

註(9) 貝類の同定には仲嶺俊子氏による鑑定結果と、下記の文献を参考にした。

吉良哲明 『原色日本貝類図鑑』 保育社 1959

波部忠重 『続原色日本貝類図鑑』 保育社 1961

白井祥平 『原色沖縄海中動物生態図鑑』 新星図書 1977

貝類の棲息域については主に下記の文献を参考にした。

沖縄県教育委員会 『大原』 1980

沖縄県・具志川村教育委員会 『清水貝塚』 1989

読谷村教育委員会 『吹出原遺跡』 1990

笠利町教育委員会 『宇宿戦浜遺跡』 1991

R. T. Abbott・S. P. Dance 『世界海産貝類大図鑑』 平凡社 1985

(10) 笠利町教育委員会 『宇宿戦浜遺跡』 1991

四、宇宿小学校所蔵遺物

今回の実習調査の一環として、宇宿小学校所蔵の表面採集資料の観察及び図面・写真による記録を行った。当資料の一部は白木原和美氏によって既に報告されている⁽¹⁾が、ここに改めて紹介するものである。

1. 土器（第13図 図版19・20上）

宇宿小学校には、小学校校庭及び宇宿貝塚出土と記入された遺物が整理箱に4箱保管されている。そのうち器形・文様などを推定できる土器21点について、以下に特徴を述べる。

器形により深鉢形土器、壺形土器に分類され、その他に底部片がある。

深鉢形土器（1～8・10～12・14～17）

1～3・14は口縁部が肥厚する平口縁を有し、口縁の断面形が三角形を呈するもの（1・2）と、蒲鉾形を呈するもの（3・14）とに分けられる。1は無文で口縁がやや開きぎみになるものである。内外器面ともに不定方向のナデ調整の痕がみられる。胎土は粗砂粒を多く含み、焼成は不良で、軟質である。色調は橙色を呈する。2は無文で口縁部が直立する。内外器面ともに横方向のナデ調整が施されている。胎土は細砂粒を多く含み、焼成は不良で、軟質である。色調は橙色を呈する。3・14は口縁部に比して胴部がややふくらむものである。3は頸部に縦位の沈線文が2条施されている。胎土は砂質、焼成は不良で、やや軟質である。色調は黄橙色を呈する。14の胎土は砂質、焼成は不良で、やや軟質である。色調は明褐色を呈する。

4は小片であるため、口縁部の形態の判別は困難である。器壁が厚く、口縁上部には縦位の短沈線文が施されており、その直下に1～2条の沈線をめぐらせている。内器面にはナデ調整の痕がみられる。胎土は砂質で、焼成は不良で、やや軟質である。色調は橙色を呈する。

5は無文で口縁部は帯状に肥厚し、特にその下端の肥厚が顕著なものである。内器面の口縁上部には指頭圧痕がみられる。胎土は緻密で、細砂粒・石英をわずかに含み、焼成は不良で、やや軟質である。

6は波状口縁で、外反した口縁部に波状の突帯を1条貼り付け、その突帯上に刻目を施している。外器面は縦及び斜方向の、内器面は横方向の、貝殻による調整がなされている。胎土は緻密で、わずかに石英を含み、焼成は良好である。

7は山形口縁で、1条の縦位の沈線と数条の横位の平行沈線を施し、沈線間には押し引き文を充填する。胎土は緻密で、細かい混入物を多く含み、焼成は良く、やや硬質である。

8・11・16はいずれも口縁部に押し引きによる文様が施されるものである。平口縁のもの（8・11）と山形口縁のもの（16）とに分けられる。8・11は籠目状の押し引き文が施されており、口縁の断面形は先が細くなっている。8の内器面上端近くには刺突連点文が施される。胎土は緻密で、焼成は良く、硬質で焼きしまっている。11の内器面にはナデ調整の痕がみられる。胎土は粗砂粒をわずかに含み、色調は褐色を呈する。16は山形突起の中央から縦位の押し引き文を2条施して口縁部付近をL字状に区画し、区画内には1～2条の押し引き文を充填する。さらにその下には口縁と平行に押し引き文を施す。胎土は緻密で、わずかに雲母片を含み、焼成は良く、やや硬質である。

10は肥厚させた口縁部の外器面下端に刻目突帯を1条めぐらせるものである。胴部が張っており口縁部はやや外反する。突帯下には横位の綾杉文を施す。胎土はやや粗く、焼成は不良で、軟質である。色調は茶褐色を呈する。

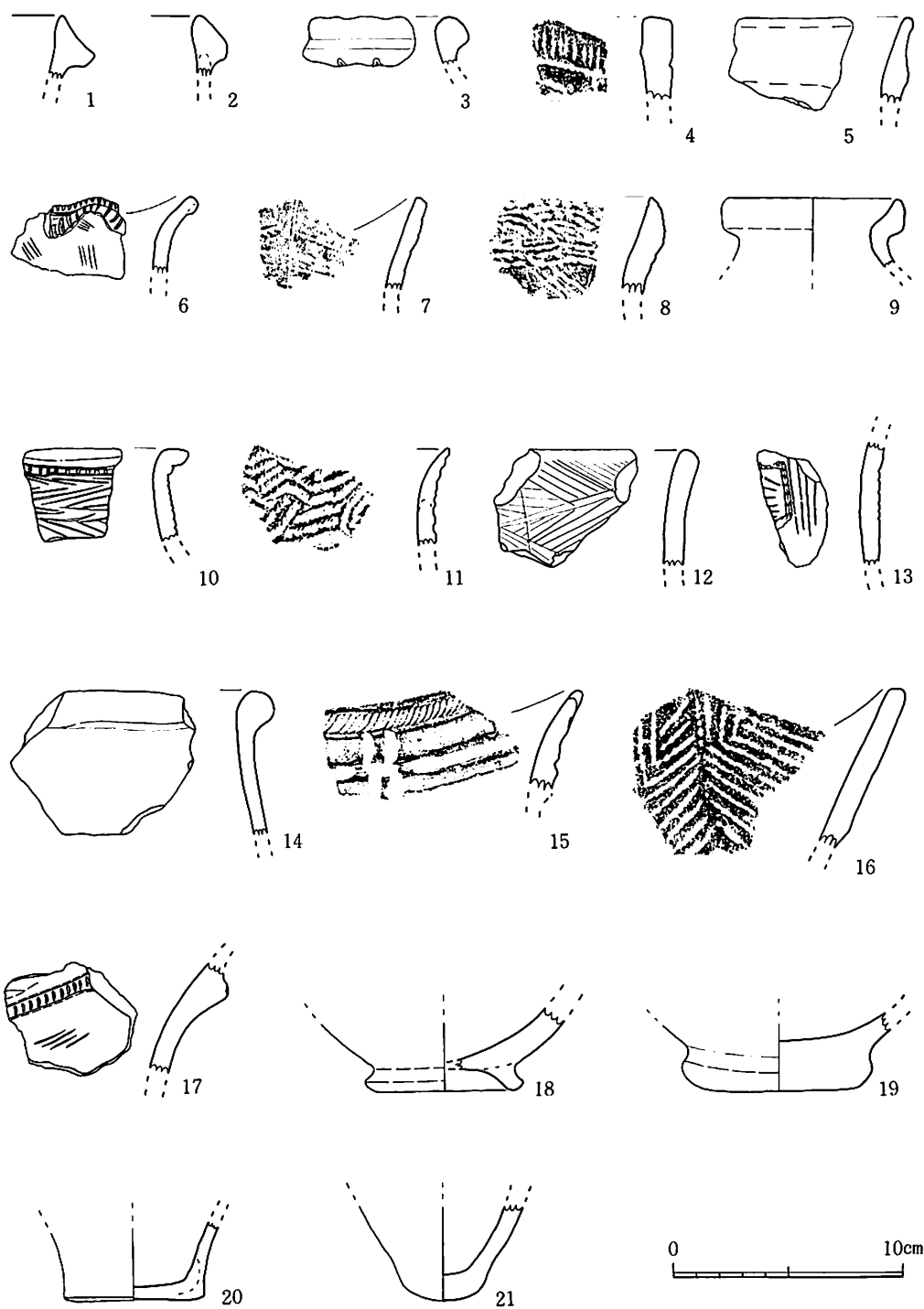
12はやや厚手で、わずかに口縁が外反する。外器面には沈線による斜位の綾杉文が施されている。胎土は砂質で、焼成は不良で、軟質である。色調は橙色を呈する。

15は山形口縁で、口縁部は断面三角形に肥厚する。肥厚部には連続刺突文と幅広の凹線文が施され、文様帯を構成する。内器面には調整時の条痕がみられるが不明瞭である。胎土は細砂粒・石英を含み、焼成は良く、硬質で焼きしまっている。外器面は褐色、内器面は赤褐色を呈する。

17は口縁端部を欠くものの、15と同様の断面三角形に肥厚する口縁部を有するものと思われる。肥厚部下端には刻目が施されている。内外器面には斜方向の条痕がみられる。胎土は粗大な粒子の混じる細砂粒を含み、焼成は良く、やや硬質である。外器面は褐色、内器面は赤褐色を呈する。

壺形土器（9・13）

9は径の復元可能な口縁部片で、復元口径7.3cmである。口縁の断面形が三角形に肥厚している。胎土は緻密でわずかに石英を含み、焼成はやや不良で、軟質である。13は頸部に両側に刺突文を施した突帯を「コ」字状に貼り付け、突帯の横には縦位の、内部には横位の沈線文を施すものである。胎土は緻密、焼成は不良で、軟質である。色調は明褐色を呈する。



第13図 宇宿小学校所蔵土器実測図

底部片（18～21）

18は台付土器で、丸底の体部に短く張り出した高台を貼り付けている。内外器面ともに不定方向のナデ調整がなされている。胎土は細砂粒を含み、焼成は不良で、軟質である。色調は橙色を呈する。19は平底で、底部が丸みを帯びてなだらかに張っている。胎土はやや粗く、焼成は不良で、軟質である。色調は褐色を呈する。20はわずかにくびれた平底で、底部に不明瞭な木の葉の圧痕を有する。内外器面ともに不定方向のナデ調整がなされている。胎土は砂質で、焼成は不良で、軟質である。色調は橙色を呈する。21は平底に近い尖底で、外器面にはヘラ状工具による調整がなされている。胎土は砂質で、やや軟質である。色調は茶褐色を呈する。

以上、述べてきたもののうち、宇宿貝塚出土とされている遺物は18点（1～4・6～8・10～12・14～21）であり、その他のものについては、出土地点は明らかではない。また、これらは、南部九州縄文時代後期の市来式土器に比定できる15・17を除くと、ほぼ在地土器の範疇に収まるものである。（矢野）

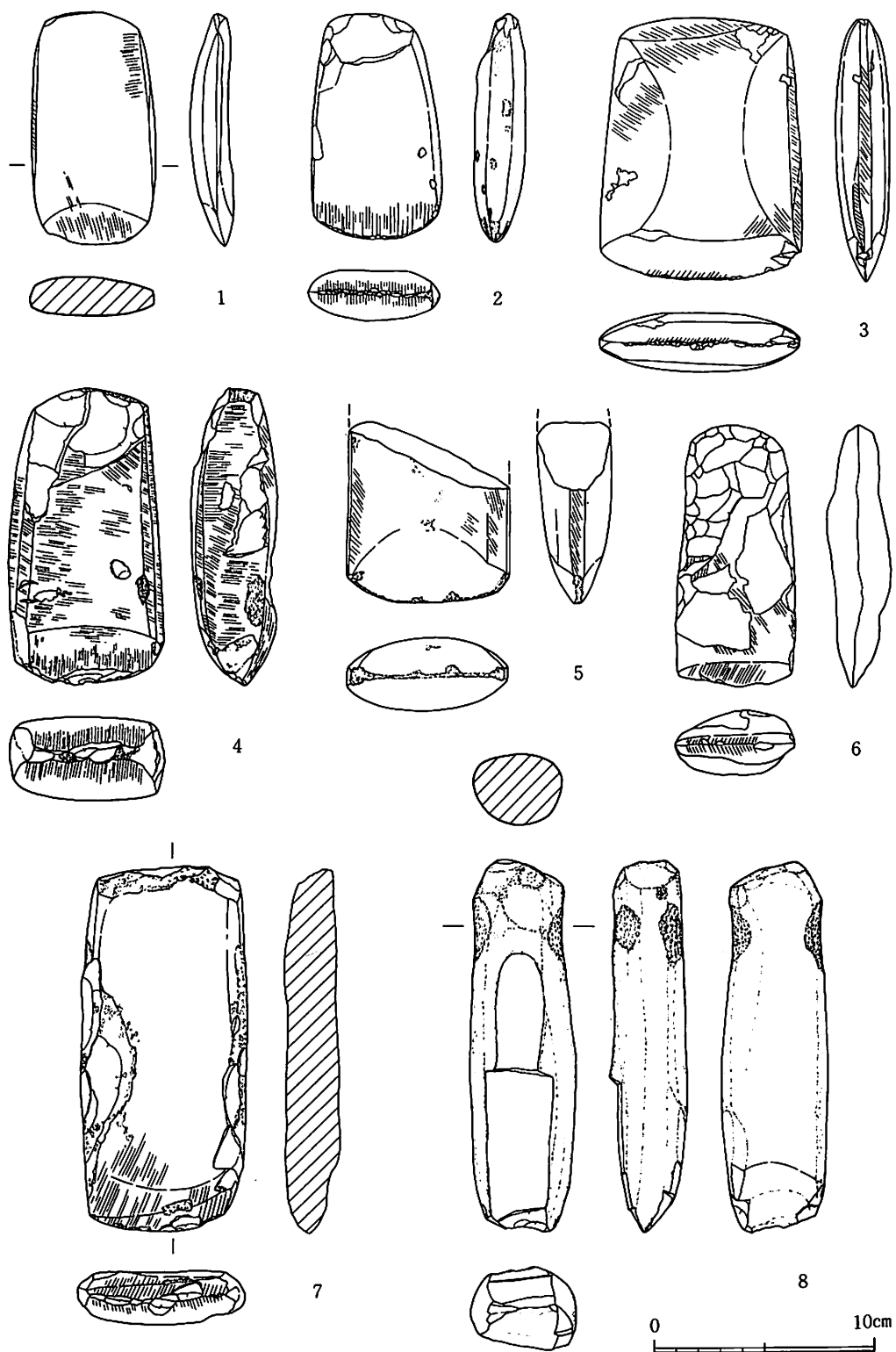
2. 石器（第14～16図 図版20下～24）

宇宿小学校所蔵の石器は、石斧8点、敲石4点、磨石類7点、いわゆるクガニイシ1点の計20点である。以下に詳細を記述する。

石斧（1～8）

石斧は、全て磨製石斧である。これらの石斧を、その大きさから小型・中型・大型に分類し以下に記述する。

小型のものとしては、1・2・6がある。1・2は平面形が長方形をなすものである。2の刃部はやや幅広になっている。刃部は、非常によく研磨されており鋭い。刃縁には使用痕がみられるが、大きな欠損は認められない。いずれも全面に丁寧な研磨が施されるが、2の側面には一部啄彫痕が残っている。1は長さ10.2cm、幅5.5cm、厚さ1.7cm、2は長さ10.4cm、幅5.9cm、厚さ2.4cmである。6は局部磨製石斧である。刃部がやや幅広の歪な長方形を呈する。刃部及びその周辺にのみ研磨が施され、基部には粗い剝離面、裏面には自然面を残している。刃縁に明瞭な使用痕はみられない。長さ11.8cm、幅5.4cm、厚さ2.8cmである。中型のものとしては、3～5が挙げられる。3は両刃で平面形は正方形に近く、全長に比べかなり幅広になる。全面に研磨が施されるが、基部には啄彫痕が残る。刃部には細かい刃こぼれが認められるが、比較的鋭利さを保っている。長さ11.9cm、幅9.2cm、厚さ2.5cmである。4は平面形が刃部がやや幅広の長方形をなし、かなり厚手である。全体的



第14图 宇宿小学校所蔵石器実測図(1)

に成形は丁寧であり、全面に研磨が施され、特に刃部周辺には入念である。刃部は両刃に近い片刃で、刃縁は使用により欠損並びに挫傷している。また、基端部は入念に啄彫を加えてあるが研磨は施されておらず、装着痕などは認められない。長さ8.7cm、幅6.8cm、厚さ3.9cmである。5は基部を欠損している。残存部全面が入念に研磨されている。刃部は両刃に近い片刃で、使用により刃先が潰れて2～3mmの幅になり、鋭利さを欠く。長さ6.7cm、幅7.5cm、厚さ3.4cmである。

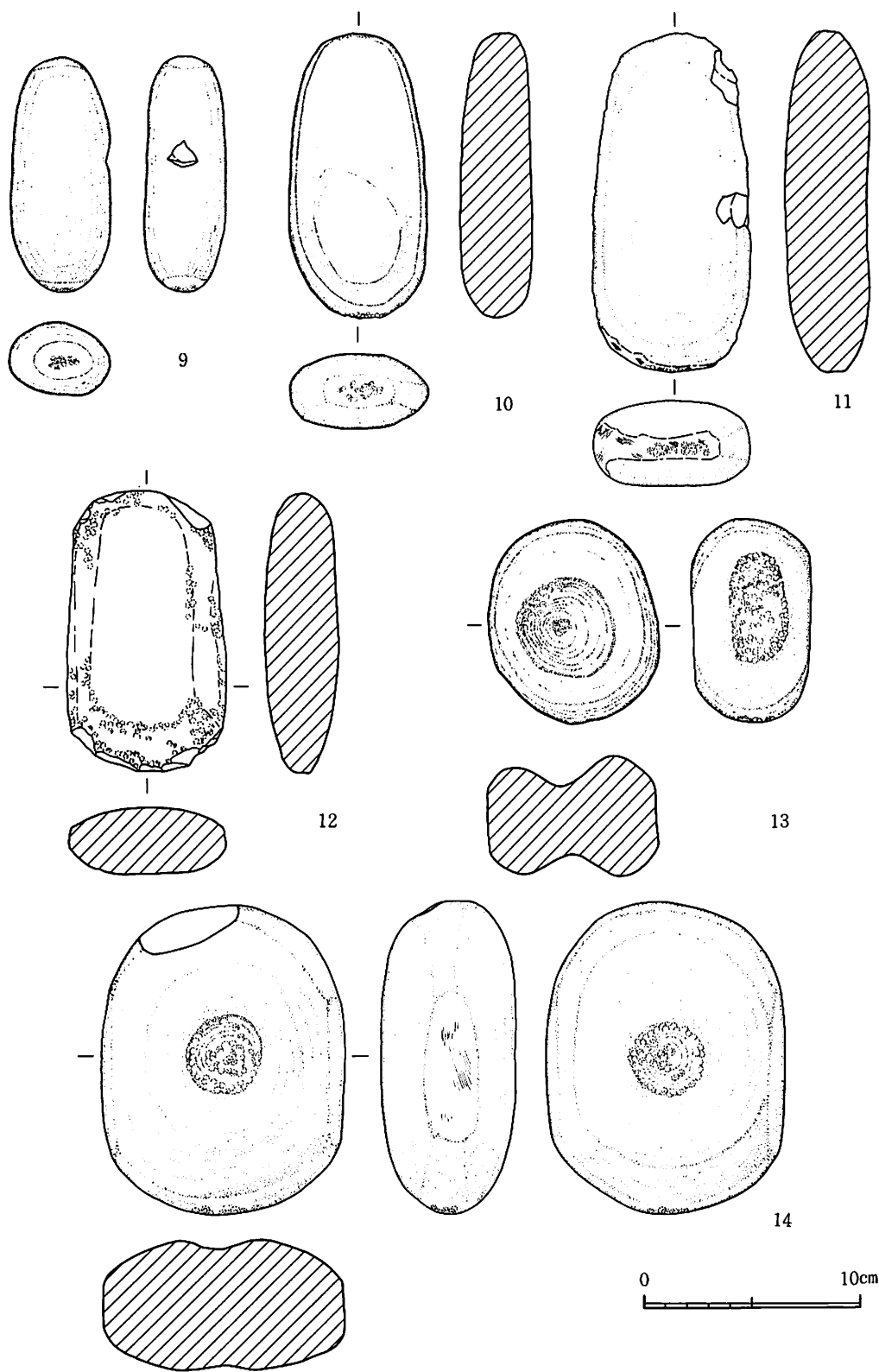
大型のものには7・8が挙げられる。7は平面形が刃部の幅と基端部の幅とがほぼ等しい短冊型をなすものである。全面に研磨が施され、刃部周辺が特に入念である。側縁、基端部には啄彫痕が顕著に残る。刃部は両刃に近い片刃で、使用により欠損並びに挫傷している。長さ16.6cm、幅7.5cm、厚さ2.6cmである。8は円柱状の石斧である。断面形は両側面が丸みをもつのに対し、表裏面には平らな面をもつ。刃部は丸鑿状に円弧を描く片刃でやや欠損している。図の表面には、刃部から基部にかけて2段の剝離面が認められるが、意図的にくりこみを施したのではなく、使用時の破損である可能性が高い。基部は装着のためか、啄彫により全周にわたってくぼめられている。長さ16.9cm、幅4.9cm、厚さ3.6cmである。

敲石（9～12）

敲石は4点でいずれも砂岩製である。その形状からいわゆる石杵などの棒状のもの（9）と下端部がわずかに開く長方形のもの（10～12）とに分けられる。9は長さ11.0cm、幅4.5cm、厚さ3.6cmである。上・下両端に使用痕が認められる。図の右側面中央に欠損部がみられるが使用とは無関係と思われる。10は長さ13.2cm、幅6.4cm、厚さ3.4cmである。両端に敲打痕がみられる。11は長さ15.8cm、幅7.3cm、厚さ3.7cmである。図の下端部に敲打痕及び擦痕が認められる。12は長さ12.9cm、幅6.4cm、厚さ3.4cmである。磨製石斧の転用品と思われる。ごく一部に研磨面が残っているが、全体にローリングをひどく受け、器面が荒れている。刃部には欠損部が幾つか認められ、強い敲打を行ったものと思われる。

磨石類（13～19）

この中には、磨石・敲石及び凹石としての機能を兼有するものも含み、これらを一括して磨石類とし、7点を含めた。両面あるいは片面に凹みをもつもの（13～16・19）と凹みのないもの（17・18）とに分けられる。13は長さ9.4cm、幅7.9cm、厚さ5.5cmである。砂岩製である。表裏面には深い凹みが認められるが、最も深い所で深さ1.4cmであり、敲打などの使用によって自然にできた凹みではなく、意図的に凹部を作り出したものと思われる。



第15図 宇宿小学校所蔵石器実測図(2)

図の表面及び周縁部に敲打痕が認められ、特に上下左右の四側面に顕著であるので、敲石との併用も考えられる。14は長さ14.4cm、幅11.3cm、厚さ6.3cmである。砂岩製である。表裏面とも径3cmの敲打による凹みを有する。両側面は研磨により平坦になっており、磨石として使用されたことが窺える。また図の下端部には一部敲打痕も認められる。全体として使用された部位にはいずれも使用痕が顕著に認められ、長時間にわたる使用が窺える。15は長さ12.8cm、幅9.9cm、厚さ6.0cmである。表面中央部に敲打による顕著な凹みを有する。その凹みの上下に相対する方向にも一部に敲打痕が認められる。上下端、両側縁部にも敲打痕がみられ、特に下端部で顕著であるが、裏面には自然面が残る。16は長さ11.9cm、幅9.9cm、厚さ4.7cmである。表面中央部に敲打による顕著な凹みを有する。周縁部全面に敲打痕があり、敲石としても使用されたと思われる。19は長さ11.1cm、幅8.6cm、厚さ4.4cmである。砂岩製である。表裏面に凹みを有するが、その深さは1mm程度の浅いものである。上下端及び両側縁部に敲打痕が認められる。表面は若干平滑になっており、磨石としても利用されている。

17・18は平面形が円に近い楕円形を呈し、断面形は18がほぼ楕円形となるのに対し、17は表裏面ともに平坦である。ともに表裏面に平滑な部分をもつが、周縁部には僅かに敲打痕が認められ、敲石との併用が考えられる。法量は17は長さ12.9cm、幅11.6cm、厚さ3.5cm、18は長さ12.8cm、幅11.6cm、厚さ6.0cmである。

クガニイシ (20)

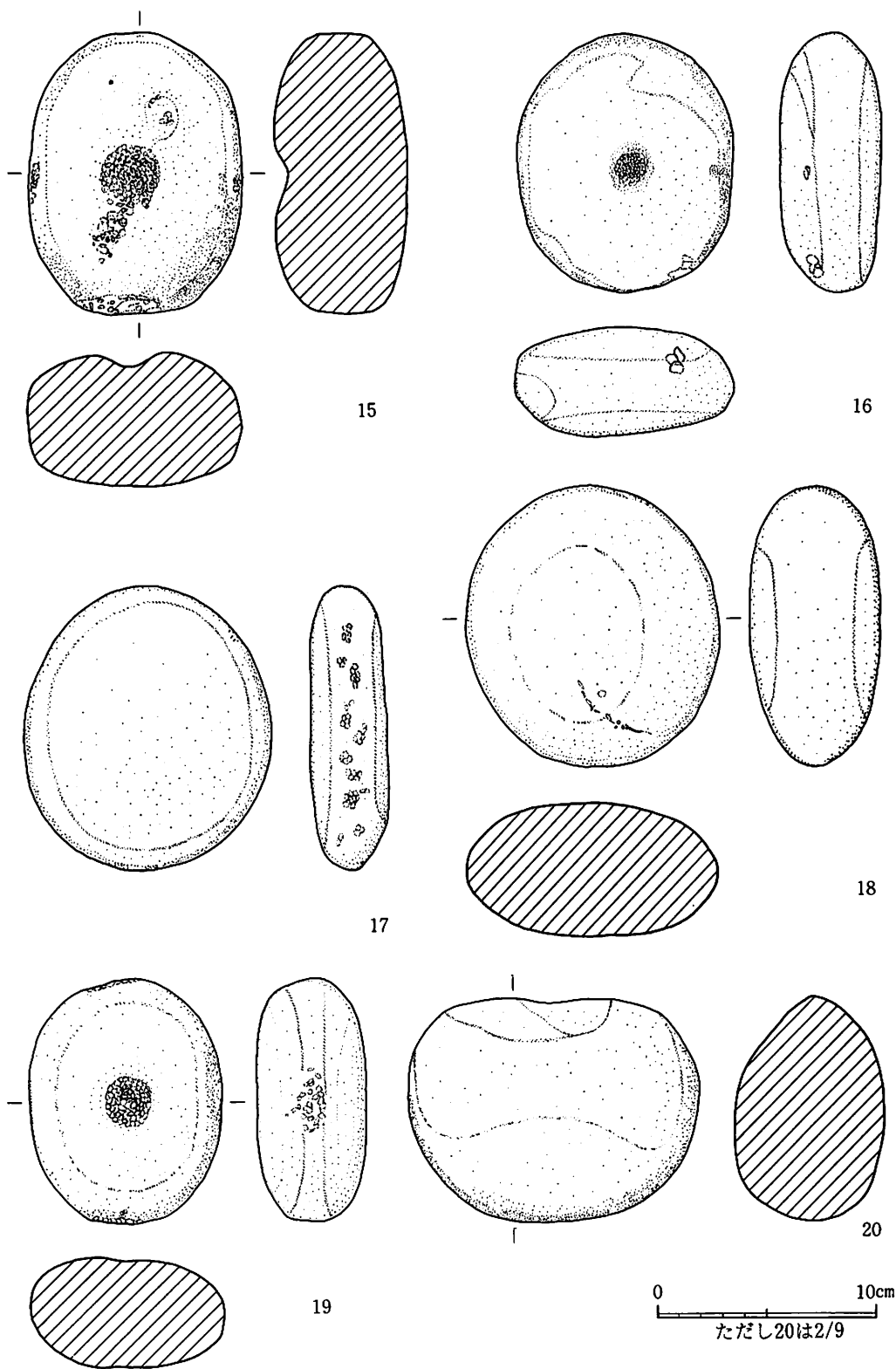
平面形は歪な楕円形をなす。断面形もほぼ楕円形となるが、図中の上方約1/3の部分が表裏ともに徐々に薄くなっており、鈍い稜を作り出している。また、上記の部分は粗く打ち欠いた後、彫彫により成形しており、その他の部位は自然面を残している。使用痕などは不明であるが、いわゆるクガニイシと考えられる。法量は長さ15.2cm、幅20cm、厚さ10.2cmである。

石製品 (図版24下)

上部に向かってややすばまる略円錐形をなし、頂部には斜め方向の平らな面を作り出している。砂岩礫を打ち欠いた後、全体を彫彫により成形している。内部は中心部に至るまで赤変するとともに脆くなっており、繰り返し加熱を受けているものと思われる。支脚としての使用が考えられる。法量は高さ22cm、底部の直径15cm、頂部の直径9～10cmである。

以上述べてきたもののうち、宇宿貝塚出土が確実な石器は11点 (1～5・7・9～11・13・14) である。 (棕梨)

註(1) 白木原和美 「大島郡笠利町の先史学的所見」『南日本文化』 第4号 1971



第16図 宇宿小学校所蔵石器実測図(3)

五、ま と め

宇宿小学校遺跡は、これまでの表面採集資料により遺跡の存在は指摘されていたものの、その実態は明らかでなかった。今回の調査は、遺跡の性格の把握を目的として起案されたものであり、発掘調査の結果、宇宿上層式土器を主体とする時期の遺跡であることが確認された。以下に今回の調査で確認された点を項目毎に挙げて、まとめてみることにする。

遺構について 今回、明確な遺構は検出されなかったが、遺跡における活動の痕跡を確認することができた。IX層上面においては炭化物の集中箇所が2ヶ所認められ、それらに伴って炭化物の付着した土器片・貝殻・獣魚骨・焼石が検出された。土器片はBⅡ・CⅡ類に分類されるものである。また、その周辺部より敲石・凹石などの石器が出土している。後述のⅦ層の状況に比して食物残滓の混入する量が圧倒的に少ないことから、廃棄の場ではなく、この地点を活動の場としていたものと考えられる。また、Ⅶ層には土器片とともに焼けた貝殻や獣魚骨が大量に含まれ、食物残滓を一括廃棄したものと考えられる。これらの貝殻及び獣魚骨とともに拳大の礫とサンゴが集中して検出され、その中には火熱を受けたものが多くみられた。また、自然堆積の砂丘と考えられるⅧ層についてのブロックサンプリングの結果と比較して、IX・Ⅶ層により多くの炭化物・魚骨が含まれていることは、IX・Ⅶ層の性格を考える場合の判断材料の一つとなるであろう。

遺物について 出土した土器片は約1500点であった。それらを器種、文様の有無、器形を推定し得るものを対象にして分類すると14類となり、その中でも、宇宿上層式の範疇に含まれるものを主体としている。以下、出土土器の中でも特筆すべきものについて述べる。

AⅣ類は宇宿上層式土器の範疇に含まれるものであるが、大島郡住用村サモト遺跡6号住居址床面において面縄西洞式土器と共伴関係が確認されている⁽¹⁾。このことから宇宿上層式の中でも古手に位置付けられるものであろう。カヤウチバンタ式土器の範疇に含まれるAⅠ類の内、口唇部に突起を有するもの(33)は、南部九州縄文晩期前半期末葉の黒川式土器の特徴ー『口縁部にリボン状の突起や頸部に蝶ネクタイ状の粘土貼付けをおこなうもの』⁽²⁾ーの影響を受けたと思われる。その影響は磨研という器面調整の技法にも窺える。AⅤ・BⅣ類はいわゆる外耳土器であるが、沖縄・奄美における外耳土器に関しては、高宮廣衛氏による形態の分類・変遷についての研究がある⁽³⁾。氏の分類に従えば8・10は横型の外耳、9は瘤状突起、11は橋状突起にそれぞれ該当する。CⅤ類は弥生時代前期に比

定できる壺形土器である。Ⅵ～Ⅶ層（16）とⅦ層（14）から1点ずつ、計2点出土した。いずれも胎土・調整が在地の土器とは異なり、かなり泥質で、器面を丁寧に磨研している。奄美諸島での弥生時代の土器を出土する遺跡には、大島郡笠利町あやまる第2貝塚・サウチ遺跡・宇宿貝塚・竜郷町手広遺跡・伊仙町面縄第1貝塚⁽⁴⁾が挙げられる。それらの中で当遺跡出土のものと同時期の、弥生時代前期の土器が出土している遺跡として、あやまる第2貝塚・サウチ遺跡・手広遺跡がある。共伴する土器として、あやまる第2貝塚では高橋Ⅱ式とそれを模倣したものが出土している。サウチ遺跡での弥生時代前期に比定される層から出土した土器は、その大半を搬入土器が占め、それらには弥生時代前期土器を模倣したものと、小片で全容が明らかでないが、突帯や沈線を施した土器が共伴している。その他に土製紡錘車や磨製石鏃、貝符が出土しているが、いずれも弥生時代前期の所産とされている。手広遺跡では第5層より刻目突帯文土器や板付式土器類似の土器が、外耳土器や山形の突起をもつ土器・台付土器とともに出土している⁽⁵⁾。

なお、土器の層別出土状況をみてみると以下ようになる。

- Ⅸ 層—宇宿上層式（BⅡ類他）、喜念Ⅰ式（CⅡ類）
- Ⅷ 層—宇宿上層式（BⅡ・Ⅲ類、CⅢ類他）、喜念Ⅰ式（CⅠ類）、面縄前庭式（BⅠ類）
- Ⅶ 層—宇宿上層式、カヤウチバンタ式（AⅠ・Ⅱ類）
- Ⅳ～Ⅶ層—宇宿上層式（CⅣ類他）、カヤウチバンタ式（AⅢ類）、弥生系土器（CⅤ類）、喜念Ⅰ式（CⅠ類）、外耳土器（AⅤ類）
- Ⅳ～Ⅶ層—宇宿上層式（BⅢ類他）、カヤウチバンタ式（AⅠ類）
- Ⅵ 層—宇宿上層式（CⅣ類他）、外耳土器（AⅤ類）
- Ⅴ 層—宇宿上層式、外耳土器（BⅣ類）
- Ⅳ 層—宇宿上層式
- Ⅲ 層—宇宿上層式、外耳土器（BⅣ類）、兼久式土器、カムイヤキ窯系陶器

これら各層の出土土器をもとに手広遺跡出土土器の層別出土状況との比較を行うと、Ⅸ層は手広遺跡の第11層に、Ⅶ層は第9層に、Ⅵ～Ⅳ層は第5層に、それぞれ対応していると考えられる。つまり、Ⅸ～Ⅶ層は縄文時代晩期相当期、Ⅵ～Ⅳ層は弥生時代前期相当期以降に比定され、Ⅴ層については弥生時代前期以降のクロスナ層と考えられる。また、その下限については、Ⅳ層以下において兼久式土器の出土をみないことから、遅くとも弥生時代後期までは下らないであろう。ただ、上記の時期の比定において問題となるのは、Ⅶ層より出土している1点の弥生系土器（14）である。その出土状況については、層の区別が判然としなかった地点からの出土であり、加えて上位の層が10cm程度と薄いため、上部からの落ち込みと判断するのが妥当であろう。なお、Ⅸ・Ⅶ層より採集した炭化物⁽⁶⁾について¹⁴C年代測定を行った結果、

Ⅸ層 3200±90yB. P.

Ⅶ層 2870±90yB. P.

(年代は¹⁴Cの半減期5730年にもとづいて計算されたものである。)

の値を得た。これらは従来の一般的な所見に比してやや古い値が出ているが、出土土器からⅨ・Ⅶ層とそれぞれ時期的に並行すると思われる手広遺跡の第11層・第9層についての測定結果とほぼ一致するものである⁽⁷⁾。

次に石器について述べることにする。石器の器種としては8種、19点が出土し、表面採集資料を含めると23点が得られた。出土資料のうち、ほぼ半数に当たる11点が磨石・敲石・凹石、石皿といった植物加工に関係する道具であり、全体の資料個体数は少ないものの、その石器組成の中に占める割合は高い。このことは一つの特徴として挙げることができ、南西諸島における縄文時代後・晩期に相当する遺跡に共通してみられる現象でもある。また、打製石鏃がⅢ層とⅤ層より1点ずつ、計2点出土している。いずれもチャート製である。現在までに奄美・沖縄諸島において打製石鏃が出土している遺跡は表に示したとおりである(第2表)。奄美大島においては5遺跡目の例であり、今回の資料も加えて現在までに10点が採集されていることになる。大部分の遺跡が1～2点の出土であり、時期も縄文後・晩期のものが圧倒的に多い。石材にはチャート・黒曜石・石英などがあるが、チャートが最も多い。チャートは奄美・沖縄諸島でも入手できる石材であるが、黒曜石は外部から持ち込まれたものである。奄美大島は隆起サンゴ礁の島とは異なり、石器製作に適した石材を島内で入手することができる。石材鑑定の結果によると、Ⅰ層から出土した黒曜石のチップを除けば、全て島内で入手できるものである。肉眼観察によると、この黒曜石のチップは九州西海岸で産出する黒曜石と類似したものである。

貝製品はヤコウガイ螺蓋製利器・ヤコウガイ製貝匙末製品などの他、装身具である貝製小玉がみられる。総数26点が採集されたヤコウガイ螺蓋製利器が目立つ以外は、いずれも小数が出土しているのみである。

自然遺物としては貝類・獣魚骨が多数出土している。既に述べたように、これらはそのほとんどを食物残滓として考えることができる。貝類はリーフ内で採集できるものが主体である。巻貝と二枚貝を比較すると、前者の個体数が圧倒的に多い。貝類の中には孔を穿たれたものが多数みられ、その99%が巻貝であった。これらの中には漁網錘として利用されたものは認められず、食肉の為の破殻と考えられる。出土層位と貝類の量との関係は、Ⅴ・Ⅶ・Ⅷ層に多くみられるという傾向があるものの、Ⅶ層の部分的な集中箇所を除いては、いずれの層においても出土状況は散在的であって1ヶ所にまとまるような様子は認め

られなかった。貝類の種類は、ヤコウガイがⅦ・Ⅷ層で多くみられる以外に、特に層的な変化はなく、このことは、遺跡存続期間において遺跡周辺の景観にあまり大きな変動がみられず、採集対象となった貝類の種もほぼ一定したものであったことを示している。獣魚骨には、ウシ（Ⅱ層より）・イヌ・イノシシ・ブダイ類・ハリセンボン類・ウツボ類・ウミガメ類の骨、カニの爪・ウニ類などがみられ、貝類の採集の他、狩猟・漁撈活動も行われていたことが窺える。

以上、各項目毎に記述してきたが、宇宿小学校遺跡について今回得られた知見から推察を試みる。宇宿小学校の立地する台地の北東斜面にあたり、旧地形は現状よりさらに急な斜面であったことが考えられる。従って、居住域としては不向きであったためか、今回の発掘調査において住居あるいはその他の集落を構成する要素となるような遺構は確認できなかった。しかし、食物残滓の廃棄・遺物の出土状況などは、この場所が集落の縁辺部であったことを示すものである。このことは、当時の生活域の主たる中心が台地上の宇宿小学校付近にあるのではないかという従来の見解とも一致するものである。また、今回の調査地点からは主に縄文時代晩期～弥生時代前期にかけての遺物が出土しており、当該期における生活域の一部として考えられる。それ以前の遺物包含層は確認されなかったが、縄文時代中期相当期に比定される面縄前庭式土器が出土していることから、宇宿小学校遺跡が縄文時代中期～弥生時代にかけて存続したことは明らかである。このことより、当遺跡が位置的のみならず時期的にも宇宿貝塚と相応するものであり、両者を相互に関連する一連の遺跡群として考えることが可能であろう。自然環境の変化とそこでの遺跡の在り方を含めて、今後の研究に期するところである。

(市川・田中・水上)

- 註(1) 熊本大学考古学研究室 【サモト遺跡(2)】 1984
(2) 山崎純男・島津義昭 「九州の土器」『縄文文化の研究』4 1981
(3) 高宮廣衛 「南島中部圏の外耳土器」
【沖縄国際大学文学部紀要社会学科篇】第18巻第1号 1990
(4) 笠利町教育委員会 【あやまる第2貝塚】 1984
河川貞徳 【サウチ遺跡】 1978
笠利町教育委員会 【宇宿貝塚】 1979
熊本大学考古学研究室 【手広遺跡(概報)】 1986
伊仙町教育委員会 【面縄貝塚群】 1985
(5) 笠利町教育委員会 【あやまる第2貝塚】 1984
河川貞徳 【サウチ遺跡】 1978
熊本大学考古学研究室 【手広遺跡(概報)】 1986
上村俊雄 「南西諸島における弥生初期文化の様相」『九州文化史研究所紀要』第36号 1991
(6) 鑑定資料は同一層中から数回にわたってばらばらに採集したものを層毎にまとめたものである。
(7) 同じく¹⁴Cの半減期5730年にもとづいて計算した年代によると、以下の値が得られている。
手広遺跡第11層 3280±90yB.P.
第9層 2680±60yB.P.

No	遺 跡 名	所在地	時 期	形 状	数	石 材	備 考	文献
1	ウ フ タ	鹿児島県大島郡竜郷町	縄文晩～弥生	凹基無茎	2	チャート・黒曜石		1
				平基無茎	1	チャート		
2	手 広	鹿児島県大島郡竜郷町	縄文晩期	凹基無茎	2	黒曜石・石英		2
				平基無茎	1	黒曜石		
3	土浜ヤーヤ	鹿児島県大島郡笠利町	縄文時代	平基無茎	1	チャート		3
4	ケ ジ I	鹿児島県大島郡笠利町	撓乱層	平基無茎	1	チャート		4
5	安 脚 場	鹿児島県大島郡瀬戸内町	表 採			チャート		5
6	塔 原	鹿児島県大島郡天城町						6
7	山 田	鹿児島県大島郡徳之島町	縄文時代	平基無茎	1	チャート		7
7	伊是名ウフジカ	沖縄県島尻郡伊是名村	縄文後期		1	片岩質製		8
8	渡喜仁浜原貝塚	沖縄県島尻郡今帰仁村	縄文晩期	平基無茎	1	変成砂岩		9
9	地 荒 原	沖縄県具志川市	縄文後～晩期	凹基無茎	10	チャート・黒曜石		10
				平基無茎	7	チャート・黒曜石		
				不 明	2	チャート		
10	隅 原	沖縄県具志川市		凹基無茎	1	チャート		11
11	シヌグ堂	沖縄県中頭郡与那城村	縄文晩期	凹基無茎	1	チャート		12
					1	チャート	遺跡聚落下の 遺跡出土	
12	室 川 貝 塚	沖縄県沖縄市	縄文晩期	凹基無茎	2	チャート		13
				平基無茎	1	チャート		
13	親 富 祖	沖縄県浦添市	撓 乱	平基無茎	1	チャート		14
14	城 嶽	沖縄県那覇市	B.C. 3世紀	無 茎	5	チャート・黒曜石	明刀銭出土	15
15	兼 城 上 原	沖縄県糸満市	縄文晩期		11	チャート・黒曜石		16
16	渡具知東原	沖縄県嘉手納町	縄文早期					16
17	喜 舎 原	沖縄県石川市	縄文晩期					16
18	知 花	沖縄県沖縄市	縄文晩期					16
19	出土地不明	沖縄県糸満市		平基無茎	1	黒曜石		17
				凹基無茎	1	黒曜石		

(1992年12月現在入手できた資料による。)

第2表 奄美・沖縄諸島(先島を除く)石鉄出土遺跡一覧表

その他、鹿児島県大島郡徳之島町神田2遺跡から石鉄の出土が報告されているが⁽¹⁾、その形態・材質等については不明である。

なお、沖縄県(先島を除く)の編年は、高宮廣衛氏の暫定編年⁽²⁾により、九州の時期区分に統一した。

註(1) 参考文献7

(2) 高宮廣衛 「暫定編年(沖縄諸島)の第3次修正」『沖縄国際大学文学部紀要社会科学科篇』 1984

参考文献

1. 熊本大学考古学研究室 「ウフタ遺跡」 1982
 2. 熊本大学考古学研究室 「手広遺跡(概報)」 1986
 3. 鹿児島県教育委員会 「土浜ヤーヤ遺跡」 1988
 4. 鹿児島県教育委員会 「ケジI・III遺跡」 1986
 5. 3に同じ
 6. 熊本大学考古学研究室 「塔原遺跡」 1988
 7. 鹿児島県教育委員会 「奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書I」 1989
 8. 沖縄県教育委員会 「伊是名ウフジカ遺跡」 1980
 9. 沖縄県今帰仁村教育委員会 「渡喜仁浜原貝塚 調査報告書[1]」 1977
 10. 沖縄県教育委員会 「地荒原遺跡」 1986
 11. 沖縄国際大学文学部考古学研究室 「具志川市限原遺跡発掘調査概報」『沖国大考古』創刊号 1976
 12. 沖縄県教育委員会 「シヌグ堂遺跡」 1985
 13. 沖縄国際大学文学部考古学研究室 「室川貝塚第3～5次発掘調査概報」『沖国大考古』第5号 1981
 14. 浦添市教育委員会 「親富祖遺跡」 1983
 15. 松村 暲 「琉球狄堂貝塚」 1920
 16. 国分直一 「環シナ海民族文化考」 1776
 17. 知念 勇 「南西諸島の石器」『沖縄歴史地図 考古編』 1983
 18. 三宅宗悦 「南島の石器聚成—沖縄篇—」『考古学』第6巻第5号 1936
- 以上の文献以外に、奄美大島の遺跡については、笠利町歴史民俗資料館の中山清美氏から御教示を頂いた。

科 名	種 名	学 名	棲息域
巻貝類 (腹足綱) 23科59種			
オナジマイマイ科	不明 オナジマイマイ	Bradybaena similaris (FÉRUSAC)	陸上
マクラガイ科	サツマビナ	Oliva (Neocylindrus) annulata amethystina [RÖDING]	
ニシキウズ科	ギンタカハマ	Tectus pyramis (BORN)	B
	ハナダタミ	Monodonta canalifera LAMARCK	B
	サラサバタイ	Tectus (Rochia) niloticus maximus (PHILIPPI)	B
	ニシキウズ	Trochus maculatus LINNÉ	D
	クロサンショウガイモドキ	Euchelus atrata (GMELIN)	B
	オオアシヤガイ	Hybochelus (Granata) sulcifera (LAMARCK)	
	ウスイロナツモノ	Clanculus clanguloides (WOOD)	D
	サンショウガイモドキ	Euchelus lischkei PILSBRY	
	フカミサンショウガイモドキ	Olivia eucheliformis (NOMURA et HATAI)	
スイショウガイ科	サザナミスイショウガイ	Laevistrombus canarium (LINNÉ)	A
	マガキガイ	Conomurex luhuanus (LINNÉ)	A C
	スイジガイ	Lambis (Harpago) chiragra (LINNÉ)	C D
	クモガイ	Lambis lambis (LINNÉ)	C D
	サソリガイ	Lambis crocata (LINK)	C D
	ラクダガイ	Lambis truncata (LIGHTFOOT)	C D
アッキガイ科	シラクモガイ	Purpura (Mancinella) armigera (LINK)	B
	ツノレイシ	Purpura (Mancinella) tuberosa [RÖDING]	B
	アカイガレイシ	Drupa rubuscaesius [RÖDING]	B
	シロイガレイシ	Drupa albolabris (BLAINVILLE)	
イトマキボラ科	コオニコブシ	Vasum turbinellus (LINNÉ)	B
	イトマキボラ	Pleuroploca trapezium (LINNÉ)	B D
	ヒメイトマキボラ	Pleuroploca trapezium audouini (JONAS)	B
	ナガイトマキボラ	Pleuroploca filamentosa (RÖDING)	D
	ミガキナガニシ	Fusinus undatus similis (BAIRD)	C
リュウテン科	カンギク	Lunella granulata (GMELIN)	B
	チョウセンサザエ	Turbo (Marmorostoma) argyrostomus LINNÉ	D
	ヤコウガイ	Turbo (Lunatica) marmoratus LINNÉ	D
	スガイ	Lunella coronata coreensis (RÉCLUZ)	B
	サンショウスガイ	Neocollonia pilula (DUNKER)	
オキニシ科	ガマオキニシ (クロミオキニシ)	Bursa bufonia (GHELIN 1778) Var.	岩礁
ツタノハガイ科	オオベッコウガサ	Cellana testudinaria (LINNÉ)	B
スカシガイ科	コバンスソキレ	Emarginula (Emarginella) eximia A.ADAMS	
タカラガイ科	不明		
	ハナビラダカラ ヤクジマダカラ	Monetaria annulus harmandiana (ROCHEBRUNE) Arabica arabica asiatica SCHILDER	D B
フジツガイ科	ホラガイ	Charonia tritonis (LINNÉ)	D
	シマイボボラ	Distorsio anus (LINNÉ)	D
	ミツカドボラ	Cymatriton nicobaricum (RÖDING)	D
アマオブネ科	アマオブネ	Thliostyra albicilla (LINNÉ)	B
	イシダミアマオブネ	Ritena helicoides laevilabris (PILSBRY)	
	アマガイ	Puperita (Heminerita) japonica (DUNKER)	B
ヤツシロガイ科	ウズラガイ	Tonna perdix (LINNÉ)	C
	スジウズラ	Tonna olearium (LINNÉ)	C
イモガイ科	不明		
	マダライモ	Virroconus ebraeus (LINNÉ)	B
	ユキゲイモ	Dauciconus striatellus (LINK)	岩礁
	サヤガタイモ	Virroconus fulgetrum (SOWERBY)	岩礁
タケノコカニモリ科	オニノツノガイ	Cerithium nodulosus (BRUGUIÈRE)	D
	コゲツノブエ	Clypeomorus coralium (KIENER)	
	キイロカニモリ	Cerithium citrinus (SOWERBY)	
	カスリカニモリ	Clypeomorus bifasciatus (SOWERBY)	

科 名	種 名	学 名	棲息域
エゾバイ科	シマバイ	Babyronia japonica (REEVE)	C
	シワホラダマシ	Polia mollis (GOULD)	
フルヤガイ科	シワアシヤガマ	Stomatolina angulata (A.ADAMS)	
ミミガイ科	イボアナゴ	Haliotis Sanhariotis varia (LINNÉ)	D
オリレヨウバイ科	クロスジムシロ	Reticunassa fraterculus (DUNKER)	
キセルモドキガイ科	オオシマキセルモドキ	Luchuena eucharista oshimae (PILSBRY)	
ウミニナ科	イトカケヘナタリ	Cerithidea rhizophorarum morchii A.ADAMS	
トウガタガイ科	クチキレモドキ	Odostomia desimana DALL et BARTSCH	
巻貝の蓋	チョウセンサザエ ヤコウガイ		
二枚貝類 (斧足綱) 10科16種			
アシガイ科	リュウキュウマスオ	Asaphis dichotoma (ANTON)	A C
イタボガキ科	オハグロガキ	Saxostrea mordax (GOULD)	B
シャコガイ科	シラナミ	Tridacna (Vulgodacna) noae [RÖDING]	B D
	ヒメジャコ	Tridacna (Chametrachea) crocea (LAMARCK)	B D
	ヒレジャコ	Tridacna (Flodacna) squamosa LAMARCK	C
シジミガイ科	シレナシジミ	Geloina papua (LESSON)	汽水泥底
イワホリガイ科	イソハマグリ	Atactodea striata (GMELIN)	A
マルスダレガイ科	チョウセンハマグリ	Meretrix lamarckii DESHAYES	C
	ホソスジイナミガイ	Gafrarium pectinatum (LINNÉ)	A
	ヌノメガイ	Periglypta puerpera (LINNÉ)	A
フネガイ科	リュウキュウサルボウ ハイガイ	Anadara maculosa (REEVE)	C
		Anadara (Tegillarca) granosa bisenensis SCHENCK et REINHART	A
	カリガネエガイ	Barbatia (Savignyarca) virescens obtusoides (NYST)	C
モシオガイ科	スダレモシオガイ	Crassatellites nanus. (ADAMS et REEVE)	C
ウミギク科	ミヒカリメンガイ	Spondylus nicobaricus SCHREIBERS	
オトヒメハマグリ科	オトヒメハマグリ	Vesicomya katsuae KURODA	

棲息域分類 A 潮間帯砂地砂泥地, B 潮間帯岩場, C 潮間帯下砂地, D 潮間帯下岩場

第3表 貝類一覧表

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	個体数	占有率
オナジマイマイ科	22	20		66	5	45	53	50	5	266	74.92
クチキレモドキ				9		3	1	14		27	7.61
アマオブネ	3	2	3	2	3	1		2	1	17	4.79
オオシマキセルモドキ				7		8	1			16	4.51
オトヒメハマグリ	左3	右1		右1			右1			6	1.69
スガイ	2		1							3	0.85
コゲツノブエ		1		2						3	0.85
イトカケヘナタリ								3		3	0.85
アマガイ							2			2	0.56
サンショウスガイ	1									1	0.28
ウスイロナツモノ	1									1	0.28
シロイガレイシ	1									1	0.28
イボアナゴ			1							1	0.28
クロスジムシロ			1							1	0.28
ヤコウガイ				1						1	0.28
キイロカニモリ				1						1	0.28
カスリカニモリ						1				1	0.28
シワホラダマシ						1				1	0.28
フカミサンショウガイモドキ							1			1	0.28
コバンスソキレ							1			1	0.28
サンショウガイモドキ								1		1	0.28
イシダミアマオブネ								1		1	0.28
	33	24	6	88	8	59	60	71	6	355	

第4表 ブロックサンプリング集計表